Skyline

Vol.4 No.2

横浜国立大学ワンダーフォーゲル部

駒と言う山

柴田晴彦

今年の7月で満61才になつた私はこの頃つくづくと「もう10年若かつたならばなあ」と思うことがある。どうもこの節になると山に登るたびに馬力がなくなつてきたことを痛切に感じるようになり、それにまだ登りたい山はいくらでもあるのでこの調子だとそれを果さないで終つてしまいそうなので、もう四年若かつたならばと思う次第である。戦争中の10年のブランクがなかつたならばこの間相当かせいだであらうから、あるいわ今頃は相当適観している境地にいたかも知れない。

処で、あれこれ山のことを考えていた折にふとこんなことを考えた。山には駒と名のつく山はかなりあるが一体どの位あるのだろう。このことを山好きな友人に話したところ20から30位はあるだろうとのことである。浦根の駒ケ岳は別にしても、北は北海道の駒ケ岳から秋田駒、会津駒、越後駒、甲斐駒、木曽駒など頭に地名をつけた名山は、関西、中国、九州方面を除いても10位は地図に出ている。山らしい山に登れるのもこと数年の間しかないと考えるので、せめてこれ等の山でもだ登つていない山には是非登つておこうと心に決めた次第である。

そこで7月19日から23日にかけて今年の卒業研究を指導している四人の学生と共に先づ秋田駒から鳥帽子岳（乳頭山）えの山歩きをしてきた。岩手県と秋田県を結ぶ国見峠　この峠は30年ほど前に生保内から琴石に山越えした時通つたことがある　の近くの国見温泉に一泊して、翌早朝宿をたつて駒の本峰に登りアミダ池のほとりでゆつくり中食をとつてから附近の踏跡の上で子供のように遊んだ後鳥帽子えのコースをとつた。湯の森山、笊森山とたどるコースは誠に快適で途中千沼ケ原でもゆつくり遊んでから鳥帽子に登りそれから一気に乳頭温泉郷の黒湯に下つて宿をとつた。つまり温泉から温泉えと結ぶコースで同行の諸君の喜ぶことおびただしい。32年の夏に八幡平の藤七温泉からいわゆる裏岩手コースをとつて滝の上温泉までの長いコースを一人歩いたことがあるが、形の良いエゾ松やトド松を背景として水色湖ヨウホネが一面にある池塘がところどころにある東北の山道は誠に好ましい。こんどのコースも奥岩手のそれに似

ていてしみじみと東北の山らしい落ついた気分が味えた。黒湯温泉には34年の9月の末に丁度こんどの逆コースをとつて国見温泉に出ようと思つて行つたことがあるが、その時は折悪く台風15号が予報よりもはるかに早くやつてきたため、鳥帽子から先きに進めずひどい雨の中を只一人田代平を廻つて退却してきた。さて翌日は田沢湖を見てから、これも30年ほど前国見峠越をした　抱返渓谷を昔のことを思い出し乍ら、同行の四人の諸君と共に絶景かなを繰り返しつつ生保内線の神代駅に出た。

木曾駒（伊那地方では木曾駒を西駒といい甲斐駒を東駒と呼んでいる）もまだ登つたことのない山である。併し東北の山とちがいシーズン中は山小屋が大変だろうと思つたので機械工学科の中山先生と共にシーズンをさけて登る相談をした。

そこで8月22日の朝の急行で新宿を立ち辰野乗換えで駒ケ根に15時半着、14時のバスで伊勢滝に15時過ぎに着いた。最初の計画では駒ケ根で泊ろうかとも思つたが、伊勢滝で泊れたらその方が翌日楽なのでとりあえず伊勢滝まで行つてみることにした。駒ケ根からここまでのバスは夜行できた人のための6時発と朝の急行できた登山者のための14時発の二本きりである。ところがバスの終点には一寸した茶店があるだけで登山者を泊めていないらしい。ではということで予定通り黒川を少しさか登つてウドン坂から一丁ケ池を経て千畳敷の小屋に行くことにしたところ、茶店の婆さんが宝剣（剣ケ峰）の北側に新しく天狗荘という立派な小屋ができたからその方がいいとしきりにすすめるのである。天狗荘まではここから3時間もあれば充分だし、御来光を見るために夜道をかけて登る人がある位道ははつきりしているとのことである。丁度その頃にわか雨がかなり強く降つてきたのでしばらく休み乍らどつちにしようかと相談した。16時に伊勢滝を立つとして人が3時間かかるところなら、こつちはどう頑張つても4時間はみなければならない。そうすると小屋に着くのは20時ということになるので山のルールからいつても初めての道ではノルマルとは考えられない。それももう少し時期が早ければ20時になつてもまだうす明るいからいいが、8月も下旬となつては　時では完全に暗いからどうも少し危い気がする。同じバスに乗合した女性1人をまちえた4人の若い元気な連中も、最初は矢張り千畳敷コースの積りだつたのを変更して天狗荘に行くことにするとのことであつたので、雨のあがつた16時少し前に一緒に出発した。併しとても元気のいいとの連中にはついて行けないので先に行つてもらうことにしてそのあとに続いた。静ケ池えの途を分岐する7合目か

らいよいよ相当の急坂となる。それでも一刻も早く小屋に着かねばと思つて相当頑張るがなかなか苦しい。やつと樹林をぬけて駒飼ノ池の下あたりに着いた時は完全に暗くなつてしまつた。この辺から道は全くの岩場になり懐中電燈でところどころ岩肌につけられた赤いマークをたよりに苦闘を続ける。風が少し出てきたが幸い天気は良いし10日位の月もあつたので、もう少しの辛棒と思つて頑張りぬいてやつと稜線に出ることができた。東側に目をやると駒ケ根あたりの町の光が美しく見えるし、西側には福島か上松あたりの光がこれ亦素晴しい美さで眺められる。しばらくは夢でも見ているような幻想的な気分にひたつていたが、腹もへつてきていることゞし早く小屋を見つけねばとやつと気がついた。併しどうも小屋らしいものが見当らないので、さてどうしたものかと考えたすと急に吹く風が寒く感じられた。ここであわてては大変と岩かげによつて風をさけ乍ら、地図とあたりの地形とを見比べていろいろ判断するがどうも小屋らしいものが見当らない。これは困つたことになつたと時計を見ると21時近い。その中山さんが小屋の屋根らしいものが見えたというので、やれ助つたとその方向に行くとどうもおかしい。磁石を見るとまに向つている。それでもとあらこち探し廻つたがさつぱりである。少し不安になつた中山さんが寒い寒いとふるえ出すし、自分もこんなことをしていたのではどんなことになるか知れないと思つて内心は心配になつてきた。併しなんとしてでも小屋を探さなくてはと思つて、なかば夢心地になりながらもあちこちと見当をつけて歩き廻るがどうしてもわからない。ふと時計を見ると既に22時である。このままこの辺をうろついていては遭難ものと考え、幸い天気はよいから少し下つて適当なところでビバークする決心をした。そこで磁石をたよりに駒飼ノ池あたりまで下つたが、風当りが強くとてもツエルトもシュラーフも無しではどうにもならないので、とうとう静ケ池まで降りて夜明けを待つことにした。そして適当な所を見つけてはい松の下にもぐりこんだ。この頃月は駒本峰にかくれてしまい満天は降るような星の輝きである。寒いことは寒いが風は少しはさけられるし先づ生命だけは大丈夫と思つたとたん腹がとてもへつているのに気が付いた。非常用の乾パンをとり出してたべたが水筒の水も残り少くなかなか喉に通らない。こんな不時のビバークなど近ごろしたことがないので、さつきの婆さんが無精にしやくにさわる。お互に寝込んでは風邪でも引くと大変と寝そうになつたらおこし合うことにした。ねむさ気ざましに色々なことを話し合うが寒気の上らぬことおびただしい。たき火で

目次

駒と言う山 …… 部長 宋出 …… 1
夏期合宿
夏期合宿を省みて …… 主将 高橋 …… 6
夏期合宿を顧みて …… 前主将 吉野 …… 8
合宿を終つて 工二 谷
山行き 学二 橋出
無題 工一 中村
星座 工三 渡辺
赤の花に思う 学四 倉田
乳母石 経三 井田
合宿日記より 学一 佐々木一
みだが原の植物 学三 田中
気象報告 工二 斉藤
合宿記録 …… 22
新人合宿 …… 25
反省 副将 渡辺
マネージャーとして M学三 平林
ある種の道しるべ 学一 村瀬
合宿の日記 学一 須賀
新人合宿の記 工一 深尾
新人合宿の日に 学二 田中
OB便り …… 51
OB会創設と半歳 経OB 松本 …… 51
雑感 工OB 高納 …… 55
牧員会雑便り …… 55
女子合ワンに参加して …… 学四 岩村 …… 56
人物寸評 …… 59
禁止事項 …… 工四 藤林 …… 62
個人ワンダリンゲ …… 64
八方尾根漫遊記 …… 工三 江崎 …… 64
ナサヶ島「八丈」 …… 工三 井上 …… 66
鳴島決死の縦走 …… 工二 谷上 …… 69
の と …… 71
能登島 学二 寺沢
風の話 工一 亀井
九十九湾 工四 塚原
輪島の朝市 工一 諸角
ずぼら会計にをるの記 工一 岡本
能登の日記から 工一 深尾
能登でのお話 工三 井上
能登の旅をふえて 学三 広瀬
最初で最後の話 …… 工三 白井 …… 77
隠岐の印象 …… 工三 永田 …… 78
みちのくの詩郷しぶたみを訪れて …… 学三 平野 …… 81
越高回想 …… 学三 鎗病 …… 81
ワンゲル用語考 …… 85
お国自慢 (静岡の巻) …… 工三 金田 …… 84
編集後記 …… 88
記録 …… 89

夏期合宿を省みて

主将　高橋　俊吾

今年も六月初め行われた所人合宿から帰つて早々、反省会も待たずに、当部に於て年中最大行事の一つである夏期合宿への準備に掛つた。

候補地は立山弥陀ケ原。そもそも夏期合宿は、全部員の参加のもとに総力をあげて行われるべきである。従つて部員は一ケ所に集結すると共に、我々としては疾走、集中形態等による比較的部の力を分散しなければならない様な合宿を行うには未熟であるから、ベース・キャンプを受けてピストン形式で行うワンダリングが良いのではないかという現役員の意見を反映しての場所選定であり、おとそ八十名を越えようとする合宿の目的地を選ぶに当つては、相当に場所的な制約を受けていた様だ。

もず役員会議に於て目的地弥陀ケ原が最終的に確認された後、主副将、マネージャー、企画係、学年代表により、合宿準備委員会が結成され、第一回会合が六月十一日に開かれたのである。こゝでは各役員、日程、コース概要、偵察先発並びに具体的な行動予定等が決定され、直ちにこの委員会は解散せられた。

ついでこの委員会の決定の下に第一回偵察が六月下旬現地に向つたのであるが、連日悪天候に見舞れ、頂初の目的であつた現地交渉並びに偵察登山のうち後者を実行することが出来ず、後の剣岳登山の可否を決めるに当つて支障を来した事は誠に残念であつた。しかし、この現地交渉の結果、今合宿のキー・ポイントであつた所の燃料

薪についての見通しがついたのである。

かくして準備は着々と進行し、七月十八日になつてリーダーによる第二回偵察登山を主視として出発し、途中から先発隊と一緒になつて合宿本隊を迎えた訳である。

次に今回初の試みとして弥陀ケ原散策の日を一日設けたことである。自然に対する諸君の愛着の念を大いに伸長してもらおうと云うのであるが、これによつて諸君が花や鳥に興味を持つ様になつたなら、それだけで結構だと思う。方法等については今後大いに研究されるべきものではないだろうか。

こゝで、諸君も御存知の通りであるが、今合宿に於て初め予定されていた剣岳登山が中止された事である。落胆された人も多数有つたのではないだろうか。しかしこれは第二回偵察隊によつて、剣岳は我々が普段活動している、又これから合宿として取り上げ度とすべき領域からはずした方が良いのではないかという意見の一致をみての結論であつた。つまり我部としては、あくまでも危険回避の立場で行動しなければならないのである。我々が訓練してそこまでに部のレベルを引き上げるか否かは又別問題なのである。

問題点は未だ色々残されている事と思うが、何とか無事に一人の事故もなく全部のスケジュールを終らせる事の出来たことは何よりである。が反省会でも取り上げられた様に、ボッカの必要性の問題、ベースキャンプであるためコースが単調になり勝ちである事、雨による停滞日の活用のし方等今後共大いに研究されよう。

合宿は、その準備期間からすでに始つているのであり反省会が終るまでのすべてが含まれるのである。又今年の合宿は次に来るべき合宿につながつているのであるから今回の合宿によつて経験した事が次にどの様に生かされているかによつてこの合宿自体の評価が決定されるのだと言つては言いすぎであろうか。

夏期合宿を顧みて

前主将　吉野　大次郎

今回の夏期合宿は当ワンゲル部史上始めての多くの部員を動員し、ベースキャンプ方式とはいえ燃料、コース等に大きな困難があつたにもかかわらず、盛大にその全日程を無事に終え得たことは全く役員諸君の努力と部員全員の協力の結果であることはいうまでもない。

ところで合宿後三ケ月を経た今、この合宿をもう一度振り返つてそれに反省を加える必要がある。

抽象的に夏期合宿一般について考えると部活動の中心として七月に行われるこのワンゲル活動と他の活動との間に一線を画いて考える必要があることは当部の性格、あるいは年間行事の一つとして他のワンゲル活動とこれとを比較してみれば自明のことである。この点をもう少し詳しく説明すれば部の性格、部の目的論から考えねばならないが、当部が単なるレクリエーション、あるいは社会人になる為の基礎訓練のみを目的とする部でない限り、部自体がある目的を持ち、それに応ずる活動をする機会がなければならない。この特徴を発揮し、この目的に部全体として取り組む機会が夏期合宿にあるべきである。他のワンゲル活動はこの夏期合宿を完遂する為にトレーニング、ワンゲル必須訓練、リーダー養成、あるいは個人の楽しみを与えることを目的としてなされるべきであり夏期合宿がこれらの活動と同様に取り扱われて普通のワンゲル活動の延長でしかないものであれば夏期合宿として意味は殆んどないといつてもよかろう。

ワンゲル活動を反省する方法に二通りある。一つはその活動が個人にいかなるものを与えたかであり、もう一つは部としていかなる成果がその活動を通して得られたかである。勿論この二点は有機的な関連があるが、今回の合宿にこの二通りから反省してみると、個人的には実際に立山に行き自然の一部を確かめ部員相互の親睦をはかり規則的な生活を体験した等あげられるが、残念ながら部としては部員に以上の機会を与え実際に立山で八十名のキャンプ生活を行つたという点に留まるのではなかろうか。ここに合宿がある目的の基になされて部として一つの結果が得られたならばそれは大きな進歩といえよう。それでは理想的な夏期合宿とはどの様な目的を持つてどの様な形態で行われるものかを考えることが部員各自に与えられた宿題である。

最後に今回の合宿で剣岳登山が前倒まで変更されたことは部員諸君には誠に残念だつた点があるいはあつた

かも知れないが当部の能力、団体性等を素直に判断した役員の態度が称賛されるべきであり、複雑な交通関係の交渉、燃料の調達、文化的な情報収集の実施等は非常に困難であつたが、部にとつてはこの困難は有意義であり、このことはワンゲル史上に長く記録されるべきであろう

ともかく今合宿はワンゲル史上最大の合宿であつたことは大いに意義のあつたことであると思われる。

――合宿を終つて――

工二　谷　昭仁

青い空に浮ぶ雲を見詰めていると、フット自分が別山の頂上にいるような幻想にとらわれます。遠々と続く山並み、覆いかぶさるように聳り上つた純白の入道雲、目にしみるような緑、立山の荘厳な姿……　活気に満ちた夏期合宿も、遠い昔の様に感じられます。ここで、何を何しよう（？）と思いまして、弱い頭で絞り出したおぼろげな記憶から、特に、合宿中の生活面で気付いた点を中心に、取り出してみましたがどうなりますやら……。

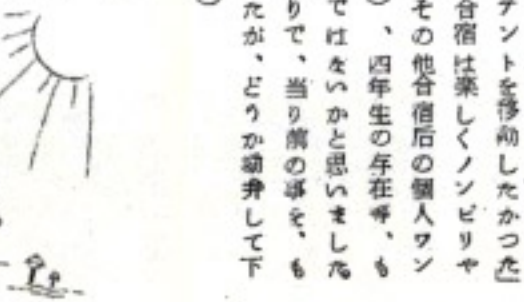
まず最初に、活動形態についてですが、ベースキャンプを建いての生活で、更に毎日の行動に「ゆとり」がありつた事は、言うまでもなく、肉体的、精神的にも非常なプラスとなり、それだけに　剱岳の風物に、又部員同志接触する機会が多く得られたのではないかと思います。その点、試みとしての「注意の日」は「休息の日」の性質が強かつたようですが、植物の名を覚えたり、絵を書いたり、見えない星を眺めたり（？）して、のんびり、楽しく過せました。特に見るべき成果はなかつたかも知れませんが、今后さらに発展させる性格は十分持つているものと、確信しています。

次に炊事の事ですが、食当が輪番制となつた事で、やはれ気味になつたようですが、あの状態で、隊別に炊事をする様になつたら、カマドの増設、薪の浪費、燃料係の負担の増加等が予想出来ますし、更に行動するにも（今回の様にコースが単一な場合は特別でしようが）時間的制限が更に加わるのは明らかでしよう。今后の合宿に於て、隊別で炊事をする場合は多々あるでしようから、「仕方がない」ですまさず、一考する必要がある様に感じました。尚、細かい事ですが、食べず嫌い、毎回飯を残してしまう等、チョット気になりましたね。

各隊、毎日のように、ミーティングをやつていたようです。僕の属していたA隊も二回程会を持ち、年寄り衆の

昔話しで楽しくすごしたものです。このミーティングこそ親睦をはかる良いチャンスですから、機会ある毎に、顔を合せても良いでしょう。この点A隊についてはもっとミーティングがほしかった様に思われました。又、その雰囲気を各自積極的に作るよう心がけるべきだった様です。尚、停滞の日を漫然と過してしまいましたが、工夫する必要があるようです。（マージャンをやれば楽しいってトンデモナイ）八月九日の反省会も合宿の継続と考えて、この時に感じた事も、付け加えます。合宿の目的である、親睦、強化、その他各研究等が、どの程度に充実したかわかりませんが、各自それなりに収得した事柄は多いでしょう。合宿での体験は、部活動に欠かせぬ物ばかりですから今回の合宿に漏らず、合宿后の反省は重要な意味を持つていると言えましょう。行動形態について色々と発言された中で「テントを移動したかった」には思わずゾー。何はともあれ合宿は楽しくノンビリやりたいですね。（タイマン）その他合宿后の個人ワンダリングの程度（体力的に見た）、四年生の存在等、もっと深く話し合つたら面白いのではないかと思いました。

何だか十年部員の様な口ぶりで、当り前の事を、もつともらしく書いてしまいましたが、どうか勘弁して下さいゴメンナサイ。……（完）



山行き

学二　橋　出　美代子

松風が私の日焼けしたほおをなでて行く。遠く波の音が私の疲れた耳に響いてくる。

あゝ　そうだ、もう家に帰つているんだわ。

楽しくもあり辛くもあつた一週間が走馬燈の様に頭の中をかけめぐる。重い荷物をしよつてカタツムリの様に歩いた最初の日。おまけに大きなおなべと薪のアタセサリーまでもつけて……。全体からもるとライト級位かも知れませんけど。ともかく印象的な数時間だつたことは確かです。

その次は雨の中の食当　でもこれは良い方の思い出に属すると言つて良い。この日の食当のおかげで私のいた隊、即ち白樺曾隊程どいいコースを得ることが出来た様は他にいないと思いますから。

キャンプサイトから良く見える霧島沢をゆつくり上つて行く。「いーち、にーい」心の中で唱えながら石、左と交互に足を運ぶ。朝の空気のおいしいこと。一杯すいこんで又、「いーち、にーい」。小屋近くなつて山のやせた老体に大きなリュック（中味はお考え下さい）をしよつて降りて来るのに出会つたことがある。」とか聞いた時はやつぱり山へ行くにはよつぽど用心しなくちゃと痛感した次第である。ちよつとお説教めいてきちゃつたわね。

下りの楽しかつたこと。国大のミヤマ人間の全てにテント以外で会つたのは私達の隊だけだと思う。このタイミングの良さ。御鉢小屋でB隊と別れ、遥拝峠へと足をのばしたら、そこにAとDの人がどちゃどちゃと赤い花を咲かせていたわけである。でもタイミングが良すぎて途中大きな精神的衝動を受けた。

「ゴタ！」思わず仕液をのみこむ

頭の上には強い日の光がoutlookとふりそそぐ

新養成の駐場が私の胸をしめつける

スペシャル・サイズのギスリング

前後のプロレスラーばかりの先輩

あゝ！近大の山岳部員でなくて良かつた

今も山々を眺らしていたと同じお日様が私の顔を明かるく照している。

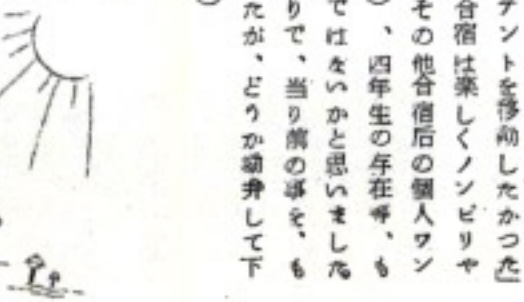
緑からまぶしい日の光が一行の顔をてらし出す。「あら！昨日と同たじね。」「でも今日の方が少し長いみたい。」切紙人形のように一列に連つた影が緑濃い草の上に長々と横たわつている。あとは歩くのに気が入つておしやべりはしばし断絶。

今日の朝は昨日より立派みたい。「ヒーし！」と心意気だけは立派どつたんだけど……。前朝の途中、ついに弱音が出ちやつて「一分だけていいから休憩して。」とロをついてしまつた。でもどうやらこうやら休みをして上までたどりつき、又仕事下ることが出来た。何しろ度が過ぎる位用心深くて、岩場となると時間が人一倍かかり前後の方に御迷惑をおかけしたことと思うが申しわけなく思つています。でも山へ行く時には用心しなくちゃね（やせがまんかしら？）

帰つて数日後、友人の従兄から聞いた話、「遥達が行つた前の日（二十二、三日頃だと思う）頃で一人が落つこちてその人を乗いている奥が鼻につんつん来た。」と。「E ノ[illegible]」と見に数子に長髪の紳士とばかり、

昔話しで楽しくすごしたものです。このミーティングこそ親睦をはかる良いチャンスですから、機会ある毎に、顔を合せても良いでしょう。この点A隊についてはもっとミーティングがほしかった様に思われました。又、その雰囲気を各自積極的に作るよう心がけるべきだった様です。尚、停滞の日を漫然と過してしまいましたが、工夫する必要があるようです。（マージャンをやれば楽しいってトンデモナイ）八月九日の反省会も合宿の継続と考えて、この時に感じた事も、付け加えます。合宿の目的である、親睦、強化、その他各研究等が、どの程度に充実したかわかりませんが、各自それなりに収得した事柄は多いでしょう。合宿での体験は、部活動に欠かせぬ物ばかりですから今回の合宿に漏らず、合宿后の反省は重要な意味を持つていると言えましょう。行動形態について色々と発言された中で「テントを移動したかった」には思わずゾー。何はともあれ合宿は楽しくノンビリやりたいですね。（タイマン）その他合宿后の個人ワンダリングの程度（体力的に見た）、四年生の存在等、もっと深く話し合つたら面白いのではないかと思いました。

何だか十年部員の様な口ぶりで、当り前の事を、もつともらしく書いてしまいましたが、どうか勘弁して下さいゴメンナサイ。……（完）



山行き

学二　橋　出　美代子

松風が私の日焼けしたほおをなでて行く。遠く波の音が私の疲れた耳に響いてくる。

あゝ　そうだ、もう家に帰つているんだわ。

楽しくもあり辛くもあつた一週間が走馬燈の様に頭の中をかけめぐる。重い荷物をしよつてカタツムリの様に歩いた最初の日。おまけに大きなおなべと薪のアタセサリーまでもつけて……。全体からもるとライト級位かも知れませんけど。ともかく印象的な数時間だつたことは確かです。

その次は雨の中の食当　でもこれは良い方の思い出に属すると言つて良い。この日の食当のおかげで私のいた隊、即ち白樺曾隊程どいいコースを得ることが出来た様は他にいないと思いますから。

キャンプサイトから良く見える霧島沢をゆつくり上つて行く。「いーち、にーい」心の中で唱えながら石、左と交互に足を運ぶ。朝の空気のおいしいこと。一杯すいこんで又、「いーち、にーい」。小屋近くなつて山のやせた老体に大きなリュック（中味はお考え下さい）をしよつて降りて来るのに出会つたことがある。」とか聞いた時はやつぱり山へ行くにはよつぽど用心しなくちゃと痛感した次第である。ちよつとお説教めいてきちゃつたわね。

下りの楽しかつたこと。国大のミヤマ人間の全てにテント以外で会つたのは私達の隊だけだと思う。このタイミングの良さ。御鉢小屋でB隊と別れ、遥拝峠へと足をのばしたら、そこにAとDの人がどちゃどちゃと赤い花を咲かせていたわけである。でもタイミングが良すぎて途中大きな精神的衝動を受けた。

「ゴタ！」思わず仕液をのみこむ

頭の上には強い日の光がoutlookとふりそそぐ

新養成の駐場が私の胸をしめつける

スペシャル・サイズのギスリング

前後のプロレスラーばかりの先輩

あゝ！近大の山岳部員でなくて良かつた

今も山々を眺らしていたと同じお日様が私の顔を明かるく照している。

緑からまぶしい日の光が一行の顔をてらし出す。「あら！昨日と同たじね。」「でも今日の方が少し長いみたい。」切紙人形のように一列に連つた影が緑濃い草の上に長々と横たわつている。あとは歩くのに気が入つておしやべりはしばし断絶。

今日の朝は昨日より立派みたい。「ヒーし！」と心意気だけは立派どつたんだけど……。前朝の途中、ついに弱音が出ちやつて「一分だけていいから休憩して。」とロをついてしまつた。でもどうやらこうやら休みをして上までたどりつき、又仕事下ることが出来た。何しろ度が過ぎる位用心深くて、岩場となると時間が人一倍かかり前後の方に御迷惑をおかけしたことと思うが申しわけなく思つています。でも山へ行く時には用心しなくちゃね（やせがまんかしら？）

帰つて数日後、友人の従兄から聞いた話、「遥達が行つた前の日（二十二、三日頃だと思う）頃で一人が落つこちてその人を乗いている奥が鼻につんつん来た。」と。「E ノ[illegible]」と見に数子に長髪の紳士とばかり、

無題

工一　中村義勝

山があつて、人が訪れる、草木を踏みにじり、鳥を驚かし、かくて落々として詩歌を作り、草木を愛し、鳥を愛するという。しかしながら、この程度の誤りはこれに限るものでない、生き物は殺してはならぬといい、牛馬を、豚を、さては蟲の頃まで喰い殺すことを家々は日々行つている、従つて多くの矛盾にもかゝわらず、「山を愛する」という行為を止めようとは思わない。愛する者の邪魔はすべきでない。だいたい富士さんを、白根さんを愛する時と言うのは、○○さんを△▲さんを愛する時と言つて引抜かれた蟹の言う事であつて、そもそも山は人間という動物種を虐殺しているのである。見給え、岩を抱擁して登る者が村鉄砲をくらつて位置エネルギーの低きあなたへと落下するのを！　我々が草木に与える恩恵は美味の頃のみである。

信仰、自然崇拝というのはもつとも原始的であるが、もつとも同感出来る、宗教には教義は不要なのであつて教義は宣伝対策の一つであり、聖歌なるものは、コマーシャルソングの元祖である、しかしながらここに人間の悪癖は表われる、神は抽象的存在であるべきにもかかわらず、具象化したがる性癖が自然崇拝なるものを生み出したのである。立山を信仰の山とした古人の心は我々の理解する範囲ではないが、それは或時をして原始的であつたと言うより、我々が誤つているのであり、仏革命に於けるごとき理性崇拝は狂気の中に成立した誤りの一つである。「神なきにしもあらず」の一言により人は神を信じ、「財布落ちてなきにしもあらず」の一言により人は下を見て歩く時と言つて喜ぶ小生ごときに既製宗教の中に没入することは出来ないが、宗教心は持つているつもりである、とかく世人は、象徴的偶像と、教義のないものを宗教と呼びたがらない、よつて、自分は無信仰となることに甘んじている。ワンダラーは歌がお好きである。しかし、この歌はセンチに過ぎる、自己がロマンチックな感情に浸るための興奮剤として、日々常用しておられるようだが、多用すると副作用も起つて来る。合宿が歌い遊ぶ場となつている限り避けがたい悪癖であると思うが、合宿の名によつて、許してしかるべきものとしておく。

都会で生活する人は本当の星座の美しさを知る事が出来ませんが、我々山で生活する者にとつて、星座は忘れる事の出来ない神秘的な美しさを与えてくれます。ワンゲルの教科書には、「夜は静かに休養すべし」と書いてありますが、たまにはこつそりテントからぬけ出して、夜空を眺めるのも悪くないでしよう。夏の空で誰でも最初に眼につくのは、北西の空にその柄を直立させている北斗七星でしようか。実はこの七つの星は大熊座の一部で、そのお腹の部分にあるドゥーベとメラクを結んで五倍に伸すと北極星にぶつかります。ギリシヤ神話によると大熊の前身は月の女神ダイアナの侍女カリストでジュピターに愛されて一子アルカスを生んだ事が女神の怒りにふれ、熊に変えられたそうですから、これは熊の熊でしようか。東の空を見ますと、三つの一等星を結ぶ二等辺三角形があります。この中、天の川の中央にある青白い星が白鳥座のαデネブで、尾という意味です。これと嘴に当るアルビレオを結び、更に羽に当る四つの星を加えると、大きな鳥の姿になります。今年の夏、三島運輩の辺から霧羽岳を見た時、この白鳥座を連想しました。何か似た所がある様です。三角形の残りの二つの中青味がかつた方が夏の女王と呼ばれるヴェガで、黄色い方が

蠍座のアルタイルです。知名でいうと牽牛と織女に当り七夕の伝説を生んだロマンチックな一対の星ですが、アルタイルとはアラビア語で飛ぶ鷲という意味になり、ヴェガは落ちる鷲という意味で、やはり一対の星と考えられていた様です。この天の川をはさんで渾然と輝く二つの星は、山ならば黒部川をはさんで向いあつている剣と鹿島槍に喩えたらよいでしようか。今度は南の空を見ると、ルビーの様に赤く輝いている一等星が見えます。これがさそりの心臓アンターレスという星です。これはギリシヤ語のアンチヤーレスがなまつたものですが、アーレス（火星）に対抗するものという意味ですさそり座は黄道に位する星座ですから、火星がこの近くを通る時には両者がその真紅の輝きを競う訳です。この夏の王者アンターレスを中心に十数個の輝星から成るさそり座は一度憶えたら絶対に忘れない星座ですから、夏山へ行つたら南の地平線上にこのS字型の星座を見つけて下さいちよつと見ると皆同じ様で、区別のつかない沢山の星もこの様な神話や伝説を思いうかべ乍ら眺めると興味がわいて来ます。夏の星座にはこの他に、射手、竜、ヘルクレス、蛇使い、冠、牛飼等があります。

工三　渡辺享英

――紫の花に思う――

学四　倉田　郁代

郷愁……。紫という言葉は不思議と郷愁を感じさせる紫色は全く日本的な色だ。

七月末の弥陀ケ原に於ける夏期合宿でのこと。山に入り五日目の剱剣登山の日の事であつた。別山乗越から前剱までの山道沿いに、あるいは岩の割れ目にイワギキョウの花が咲き乱れていた。真夏の強烈な日射しに疲れ果てて歩いていて、誰にでも目につく花である。高さ十cmはあろう、頂の頭頂に一個開いた青紫の花は赤茶けた土や岩に一層浮き立つていた。そしてこの花のあたりには大抵それよりもやゝ大きめな濃い紫の花を見い出す。それがチシマギキョウである。チシマギキョウはイワギキョウに似ているが、ただ毛とがくの裂け方に大きな違いがある。新伏の剱形をした大きな花は下向きに開らいている。壁に置くされた姿は風に揺れて、あたかも我々にかたりかけているかのようである。両方ともキキョウと名の付く如くキキョウ科の草花である。キキョウと言えば秋の七草の一つ、又バラ・カーネーション等と西洋の花の氾濫している此頃、キキョウ自体日本的であり、非現代的な花である。が紫という色も今の生活から失われつゝある色である。事実紫色は洋服には着こなしが難かしいとされあまり使われない。だが着物には紫が多く使われている。着物に染められる紫は日本独特、否江戸時代が生みだした独特の色だからである。「京紅に江戸紫」という言葉がある位いだから。江戸の紫は京都の紅に相対するもので江戸を象徴するからと云つて良い。そして特に歌舞伎の世界でより美しい色にと染め上げられていつたらしい。実際歌舞伎には紫には非常に効果的に又巧に美しく生かされている。助六の鉢巻も悪の病にふす夕霧の特に長く垂らした鉢巻も美しい江戸紫だ。そして二枚目の役者は紫の着物が似合う事が一つの条件でさえあつた。

紫という言葉はもともと紫草という草の名から起つたものらしい。式敷府に咲く紫草の汁を染料に用いたところだと思われる。紫色は江戸時代に完成したが紫という言葉はもつと古くから紫草に纏わる美しさと気高さの形容として使われていつた。萬葉の女流歌人額大王とその愛人の大海皇子の歌

あかねさす紫野行き標野ゆき
野守は見ずや君が袖振る

紫草のにほへる妹の憎くあらば
人妻ゆえに我恋めやも

又伊勢物語に

紫の色こき時はめもはるに
野なる草木ぞわかれざりける

地肌の出た山道を登り下りしていた私は紫の花をみて紫に神を江戸紫の衣裳を思い、又素朴な萬葉の人の心根と紫草の咲き乱れる大和平野を思い一瞬、時の流れを忘れていた。ふと我に還ると頂に立つていた。目の前にぐんと聳え立つた剱の姿が目に入る。

―風　俗―

乳母石

高三　井田　真司

乳母とは、主人の子に乳を与え育てる女でうばともいう。―と辞書にある。乳母は主人の子の母親であると同時に乳母子の母親でもあるわけだから、恐らく捨てがたい子どもの良さを知り尽していたことだろう。乳母にとつては主人の子も吾が子も愛情の対象になり得る。しかし血のつながりは宿命的なものであつて、特殊な時代的背景を考慮してみても、本当のところは、主人の子に対するよりも吾が子に対してより断ちがたい絆を意識するに違いないと私は常識的に判断する。そこで、邪道は承知の上で、乳母石の伝説に私なりのつけたしをして、簡単な興話でもまとめてみようと思う。

―有頼を慕つて立山の懐深く入り込んだ有頼の婚約者は乳母を供として連れていたが、乳母には姫と同じ年頃の娘が一人いた。立山に旅立つに当つて、乳母は千代の姫の供が娘との最后の別れになることを深していて沈みがちだつた。娘も母の憂愁からそれを感じとつていたが、お互に口に出すことを憚かつていたのである。有頼は、文武天皇の勅命をあつたことだし、立山の開山に心を尽している。白髭の導きによつて完全に宗教にとりつかれた有頼に女性をひき会せることは容易なわざではない。而も立山の自然の風容と厳格さは越中の平野からも熟知できる。娘は母の沈みがちな気持に同情できなくはなかつたが、しかしだんぜんと肉親に捨てられることに対する憤が執念の如く頭から離れなくなつていつた。哀しかつた。娘はこの恨を母に言つてやりたかつた。しかしその後何かを決心したかのようにかたくなにみえる母にとりつくひまもないまゝ出発の日が来てしまつた。母はただ一言「年が明けても還らなかつたら、わたしの手文庫を開けなさい」と言い残すと未だ明けきらぬ朝の中に静かに出て行つた。

重苦しい冬を挟んだ半年が過ぎても、母からの便りは

――紫の花に思う――

学四　倉田　郁代

郷愁……。紫という言葉は不思議と郷愁を感じさせる紫色は全く日本的な色だ。

七月末の弥陀ケ原に於ける夏期合宿でのこと。山に入り五日目の剱剣登山の日の事であつた。別山乗越から前剱までの山道沿いに、あるいは岩の割れ目にイワギキョウの花が咲き乱れていた。真夏の強烈な日射しに疲れ果てて歩いていて、誰にでも目につく花である。高さ十cmはあろう、頂の頭頂に一個開いた青紫の花は赤茶けた土や岩に一層浮き立つていた。そしてこの花のあたりには大抵それよりもやゝ大きめな濃い紫の花を見い出す。それがチシマギキョウである。チシマギキョウはイワギキョウに似ているが、ただ毛とがくの裂け方に大きな違いがある。新伏の剱形をした大きな花は下向きに開らいている。壁に置くされた姿は風に揺れて、あたかも我々にかたりかけているかのようである。両方ともキキョウと名の付く如くキキョウ科の草花である。キキョウと言えば秋の七草の一つ、又バラ・カーネーション等と西洋の花の氾濫している此頃、キキョウ自体日本的であり、非現代的な花である。が紫という色も今の生活から失われつゝある色である。事実紫色は洋服には着こなしが難かしいとされあまり使われない。だが着物には紫が多く使われている。着物に染められる紫は日本独特、否江戸時代が生みだした独特の色だからである。「京紅に江戸紫」という言葉がある位いだから。江戸の紫は京都の紅に相対するもので江戸を象徴するからと云つて良い。そして特に歌舞伎の世界でより美しい色にと染め上げられていつたらしい。実際歌舞伎には紫には非常に効果的に又巧に美しく生かされている。助六の鉢巻も悪の病にふす夕霧の特に長く垂らした鉢巻も美しい江戸紫だ。そして二枚目の役者は紫の着物が似合う事が一つの条件でさえあつた。

紫という言葉はもともと紫草という草の名から起つたものらしい。式敷府に咲く紫草の汁を染料に用いたところだと思われる。紫色は江戸時代に完成したが紫という言葉はもつと古くから紫草に纏わる美しさと気高さの形容として使われていつた。萬葉の女流歌人額大王とその愛人の大海皇子の歌

あかねさす紫野行き標野ゆき
野守は見ずや君が袖振る

紫草のにほへる妹の憎くあらば
人妻ゆえに我恋めやも

又伊勢物語に

紫の色こき時はめもはるに
野なる草木ぞわかれざりける

地肌の出た山道を登り下りしていた私は紫の花をみて紫に神を江戸紫の衣裳を思い、又素朴な萬葉の人の心根と紫草の咲き乱れる大和平野を思い一瞬、時の流れを忘れていた。ふと我に還ると頂に立つていた。目の前にぐんと聳え立つた剱の姿が目に入る。

―風　俗―

乳母石

高三　井田　真司

乳母とは、主人の子に乳を与え育てる女でうばともいう。―と辞書にある。乳母は主人の子の母親であると同時に乳母子の母親でもあるわけだから、恐らく捨てがたい子どもの良さを知り尽していたことだろう。乳母にとつては主人の子も吾が子も愛情の対象になり得る。しかし血のつながりは宿命的なものであつて、特殊な時代的背景を考慮してみても、本当のところは、主人の子に対するよりも吾が子に対してより断ちがたい絆を意識するに違いないと私は常識的に判断する。そこで、邪道は承知の上で、乳母石の伝説に私なりのつけたしをして、簡単な興話でもまとめてみようと思う。

―有頼を慕つて立山の懐深く入り込んだ有頼の婚約者は乳母を供として連れていたが、乳母には姫と同じ年頃の娘が一人いた。立山に旅立つに当つて、乳母は千代の姫の供が娘との最后の別れになることを深していて沈みがちだつた。娘も母の憂愁からそれを感じとつていたが、お互に口に出すことを憚かつていたのである。有頼は、文武天皇の勅命をあつたことだし、立山の開山に心を尽している。白髭の導きによつて完全に宗教にとりつかれた有頼に女性をひき会せることは容易なわざではない。而も立山の自然の風容と厳格さは越中の平野からも熟知できる。娘は母の沈みがちな気持に同情できなくはなかつたが、しかしだんぜんと肉親に捨てられることに対する憤が執念の如く頭から離れなくなつていつた。哀しかつた。娘はこの恨を母に言つてやりたかつた。しかしその後何かを決心したかのようにかたくなにみえる母にとりつくひまもないまゝ出発の日が来てしまつた。母はただ一言「年が明けても還らなかつたら、わたしの手文庫を開けなさい」と言い残すと未だ明けきらぬ朝の中に静かに出て行つた。

重苦しい冬を挟んだ半年が過ぎても、母からの便りは

――紫の花に思う――

学四　倉田　郁代

郷愁……。紫という言葉は不思議と郷愁を感じさせる紫色は全く日本的な色だ。

七月末の弥陀ケ原に於ける夏期合宿でのこと。山に入り五日目の剱剣登山の日の事であつた。別山乗越から前剱までの山道沿いに、あるいは岩の割れ目にイワギキョウの花が咲き乱れていた。真夏の強烈な日射しに疲れ果てて歩いていて、誰にでも目につく花である。高さ十cmはあろう、頂の頭頂に一個開いた青紫の花は赤茶けた土や岩に一層浮き立つていた。そしてこの花のあたりには大抵それよりもやゝ大きめな濃い紫の花を見い出す。それがチシマギキョウである。チシマギキョウはイワギキョウに似ているが、ただ毛とがくの裂け方に大きな違いがある。新伏の剱形をした大きな花は下向きに開らいている。壁に置くされた姿は風に揺れて、あたかも我々にかたりかけているかのようである。両方ともキキョウと名の付く如くキキョウ科の草花である。キキョウと言えば秋の七草の一つ、又バラ・カーネーション等と西洋の花の氾濫している此頃、キキョウ自体日本的であり、非現代的な花である。が紫という色も今の生活から失われつゝある色である。事実紫色は洋服には着こなしが難かしいとされあまり使われない。だが着物には紫が多く使われている。着物に染められる紫は日本独特、否江戸時代が生みだした独特の色だからである。「京紅に江戸紫」という言葉がある位いだから。江戸の紫は京都の紅に相対するもので江戸を象徴するからと云つて良い。そして特に歌舞伎の世界でより美しい色にと染め上げられていつたらしい。実際歌舞伎には紫には非常に効果的に又巧に美しく生かされている。助六の鉢巻も悪の病にふす夕霧の特に長く垂らした鉢巻も美しい江戸紫だ。そして二枚目の役者は紫の着物が似合う事が一つの条件でさえあつた。

紫という言葉はもともと紫草という草の名から起つたものらしい。式敷府に咲く紫草の汁を染料に用いたところだと思われる。紫色は江戸時代に完成したが紫という言葉はもつと古くから紫草に纏わる美しさと気高さの形容として使われていつた。萬葉の女流歌人額大王とその愛人の大海皇子の歌

あかねさす紫野行き標野ゆき
野守は見ずや君が袖振る

紫草のにほへる妹の憎くあらば
人妻ゆえに我恋めやも

又伊勢物語に

紫の色こき時はめもはるに
野なる草木ぞわかれざりける

地肌の出た山道を登り下りしていた私は紫の花をみて紫に神を江戸紫の衣裳を思い、又素朴な萬葉の人の心根と紫草の咲き乱れる大和平野を思い一瞬、時の流れを忘れていた。ふと我に還ると頂に立つていた。目の前にぐんと聳え立つた剱の姿が目に入る。

―風　俗―

乳母石

高三　井田　真司

乳母とは、主人の子に乳を与え育てる女でうばともいう。―と辞書にある。乳母は主人の子の母親であると同時に乳母子の母親でもあるわけだから、恐らく捨てがたい子どもの良さを知り尽していたことだろう。乳母にとつては主人の子も吾が子も愛情の対象になり得る。しかし血のつながりは宿命的なものであつて、特殊な時代的背景を考慮してみても、本当のところは、主人の子に対するよりも吾が子に対してより断ちがたい絆を意識するに違いないと私は常識的に判断する。そこで、邪道は承知の上で、乳母石の伝説に私なりのつけたしをして、簡単な興話でもまとめてみようと思う。

―有頼を慕つて立山の懐深く入り込んだ有頼の婚約者は乳母を供として連れていたが、乳母には姫と同じ年頃の娘が一人いた。立山に旅立つに当つて、乳母は千代の姫の供が娘との最后の別れになることを深していて沈みがちだつた。娘も母の憂愁からそれを感じとつていたが、お互に口に出すことを憚かつていたのである。有頼は、文武天皇の勅命をあつたことだし、立山の開山に心を尽している。白髭の導きによつて完全に宗教にとりつかれた有頼に女性をひき会せることは容易なわざではない。而も立山の自然の風容と厳格さは越中の平野からも熟知できる。娘は母の沈みがちな気持に同情できなくはなかつたが、しかしだんぜんと肉親に捨てられることに対する憤が執念の如く頭から離れなくなつていつた。哀しかつた。娘はこの恨を母に言つてやりたかつた。しかしその後何かを決心したかのようにかたくなにみえる母にとりつくひまもないまゝ出発の日が来てしまつた。母はただ一言「年が明けても還らなかつたら、わたしの手文庫を開けなさい」と言い残すと未だ明けきらぬ朝の中に静かに出て行つた。

重苦しい冬を挟んだ半年が過ぎても、母からの便りは

遂に来なかつた。手文庫の中の巻紙には「人間が引き起す執われを捨てたい。わたしは生れ変つておまえを愛する。」というような意味のことが書かれてあつた。

娘は、まだ母が生きているに違いないと信じて、あとを追つて旅に出た。そこには幾何の苦闘が娘を待ち構えていただろうか。山々の雪が、夏の中で消えかかる頃、娘は山の中の美しい平地にたどりついた。極楽を思わせる野原だつた。弥陀ケ原／そしてそこから雪生ケ原に至る中途の谷間で、娘は一つの石を見て立ち止まつた。娘は仏の座像のようなその石に、母の面影をありありと認めたのである。母は私を捨てたのではない、世の中から逃げ出したのでもない、そう思うと、娘はたゞ夢中で石を眺め続けた。

乳母石は、心のある人間が心のない「もの」に変つた証の不思議な石である。

この伝説余話は、勿論私の思いつきの域を出るものではない。また紙面の都合で余りにダイジェストしすぎたきらいもあり要領を得ないと思う。あるいは、これだけは読者に呑つてもらいたいというような主題など、初めからないかも知れないのである。たゞ美しく語り伝えられている伝説を興味本位に表面的にのみ把えることをしないで、一寸ばかりケチをつけて見るのも面白かろう。この一文はその拙い一例にすぎない。

合宿余話

「つい」油断して

合宿中調上げがはやつてました。そこで我等の隊長さんは、されないようにと注意してくれました。いよいよ最後の夜になつた時「つい」その隊長さんが蚊の中に入り込んでしまいました。話し終つてもどろうとしたところをつかまつて調上げされてしまいました。御成婚記念の署箱はポケットから落ちるし、ズボンのすそはほころびるしさんざんでしたよく気がつく隊長さんも「つい」油断しましたネエ。

――合宿日記より――

学一　佐々木　祥　子

二十七日　今日は時間も十分あるので私は気の合つた友達と植物の写生をしながらゆつくりと登つて行つた　一面真白で朝の充ちたりた光線をいつぱいに受けてまばゆいばかりに光つている雪渓、私はその上を歩く時一種の幸福感を感じるのであつた。雪渓を登りミクリガ池を過ぎ山を登りつめると広々とした所に出た。青空の下に広がる草の海原、その中に咲く白くてかわいいチングルマ

ピンクの岩カガミ、鳳紫色の珍らしい虫取りすみれ、その他何十種類の花が緑の間から顔を出し、しばしの間私を恍惚とさせた。またここからは豪然とそびえ立つ剣岳を見る事が出来た。

二十八日　あまりの天気の良さに大日行きを変行して立山に行く事になつた。一歩越までは浄土と同じコースであるが天候のせいか大分感じが違う。見晴しが良く新鮮な空気を胸一ぱい吸つて気分爽快である。歩調もゆつくりだつたので案外楽に一の越へ着いた。すばらしく見透しが良い、はるか遠くの方まで見える　この分だと頂上からの眺めはきつとすばらしいに違いない。そう期待しながらかたり急の登りを登つて行く、石ばかりのごつごつとした道でとても登り難い、気が急くが足が思うように進まず呼吸も早くなる。それでも最後の力を振り絞り頂上をきわめる事が出来た。まさに感激／感激！　前方遙か遠くに富士山を見、真正面に槍、穂高、その左右に鹿島槍、常念、笠が岳　その他多数の山々を見、この果しなく続いた大パノラマの展開をしばし傍観するのだつた。そして岩に腰掛け氷砂糖を頬張つた時、その甘さとともに心に強くしみこんだ事は来て良かつたと言う歓喜に近い気持であつた。こうして私にとつて初めての合宿も色々の思い出を残し無事に終つた。

みだが原の植物

学三　田　中　康　子

雄大な立山の自然は、私達若者を始めとして、歴代の人々の魂をどんなに深くゆすぶつた事でしよう。久生うる山肌、蝶の舞う山道、冷水の河原、すべて私達の感動の世界であり、久遠の世界でありましよう。その感動の世界を少し紹介してみますと、代表的なものは、やはり可愛らしいチングルマ、ワイワイと言つている様に騒がしいハクサンイチゲ、筒の花を下向きにして咲くアオノツガザクラとツガザクラ、この二つよりもつとふつくらと桃色を帯びていた花がコツガザクラ（原地でわからなかつたもの）何となく硬い感じのイワギキョウ、やわらかい方がチシマギキョウ、至る所で桃色に咲いていたイワカガミ。オニユリもまた至るところにその美しい赤黄色の花を咲かせています。食虫食物の一種ムシトリスミレもその花の色、葉のくるまり方など面白味のある花でしよう。浅間山が第一発見地と聞いています。スミレ科とは何の関係も有りません。体中綿をかぶつている様なヤマハハコ、そして白い軟い毛をかぶり必ずたつた一つ

の花を雪の上にのせ、淋しい花のウサギギク。花の形が少し面白いヨツバシオガマ、エゾシオガマ、これは他の植物に半寄生している宿根草です。朝、顔を洗う時目をやると、アカバナダイモンヂソウが淡い紅色に咲きその下にミツバオウレンが真白に咲いていましたし、上の方には雷鳥が食べると言うミヤマナナカマド。テントサイトの河向うには大きな霊々としたシナノキンバイ、大きな体のオンタデ、白い花がかたまつて頭でつかちなコバイケイソウ。這松の下ばえとして大枚揃わなければ咲かないゴゼンタチバナ、静かな感じのコツマトリソウ、ころがる様なコケモモ、岩の間を這う様に咲くジムカデミネヅオウ等、桃色の赤ちゃんがパッと手を拡げた様です。その花の色から天にも乗る様な安心感のするキバナシヤクナゲ、桃色のハクサンシヤクナゲ。その実を人間が食べたシロバナヘビイチゴ、大きな赤い花のベニバナヘビイチゴ、果実は甘くて秋九月頃熟するとか北海道まで有るとは幸福？。その他イワイチヨウ、トウヤクリンドウ、オオバキスミレ、カライトソウ、キヌガサソウ、マイズルソウ……。名はわからずとも頭のどこかに覚えていて下されば山は又生返つてくるでしょう。

合宿余話

リクリエーション大会三題

一年の応急処置ゲームでは二年の患者はさんざん。決勝点についた患者は盲腸の皮にナイフとほう丁が乗つてたり、書目の患者には直接書のかたまりを目の上に当てたり、はてはたゞの静脈出血のお嬢さんには傷をそつちのけで後手にしばりあげたり。まつたくおそろしい一年だよ。

二年のワンゲルの一日ゲームではおしとやかな？女性までもめしをばくつかせたが、それに対抗しておもむろにはしを取出したり、おにぎりにしたりした御人もいたが、決勝点では無情な上級生に口に飯が入つていてはだめのみこめとは！

四年のヒューマンリレーションゲームはさすがに最上級生「あなた」「なんだい」とお熱いところを見せて下級生はあてられつぱなし。

三年はどうしたかつて？三年は目隠ししてたゞ歩いただけですよ。

気象報告

工二　斉藤貞夫

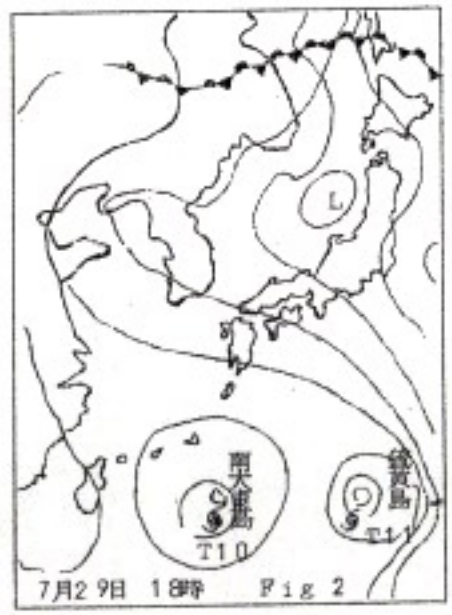
偵察隊。七月十八日～二十一日頃。この期間は千島附近に冷い優勢な高気圧があつて、そこから南東に気圧の峰が日本に張り出し夏本来の中部太平洋高気圧を押し出し、その気圧と暖い気圧の境目に前線があつて本州南岸の沖合に停滞していた。この為立山附近は連日好天が続き絶好の偵察日和で偵察隊はここぞとばかり立山の三千米のスカイラインを走り廻り偵察本来の役目を果したと思われる。しかし気圧配置からわかるように、この高気圧北方の冷い気団をので気温は低く夜間は六～七度で夏山としては比較的寒かつた。しかしこの気団も日数が経つにつれ地熱や日射で次第に暖まり、又高気圧も北方に退き太平洋高気圧と合体し本来の気圧配置に戻つた。

合羽。七月二十一日～三十日

北方の高気圧が去り太平洋高気圧が張り出してきたので天気は長すぎると思われたが、二十三日の夜から小雨が降り出して来た。雲が高かつたので一時的なにわか雨と思つたが、二十四、五日と降り続いた。雨が一度に激しく降るのではなく小雨がしとしと断続的に降るのでこの雨の降り方からみて北アルプス附近に弱い低気圧か温暖前線があるなと思つて恍てて天気図を作成したところ図1のように、果して満州にある低気圧から南東に伸びる温暖前線が北アルプスの真上を通つていた。二十三日の天候の変化は夜間だつたので温暖前線特有の雲の変化（始め巻層雲、高層雲、乱層雲に変り雨となる）はわからなかつたが天気図でみると大平洋高気圧の周囲に沿つて流れる南の暖い気流（これを一般流と呼ぶ）が日本海沿岸を北東に進み沿岸州の比較的冷い空気とぶつかつて前線が丁度北アルプス附近に発生したと思われる。この

7月24日　12時　Fig－1

前線発生を予報するのが気象係の役目だが現在の段階ではとうてい望めない。つまり北方の高気圧が退いた後、北日本北部、オホーツク海南部にかけて東西に伸びる気圧の谷が発生しその谷に満洲で発生した低気圧が東から西に移動していつたがその低気圧の引く湿暖前線が立山附近にひつかかり雨を降らしたのだと思う。従つて太平洋高気圧がもつと強く張出していわばブロッキング現象を起して前線を近ずけなかつただろう。しかしこの前線も二十六日には北上して立山では午后から天気は回復した。しかし北上した前線は北海道で集中豪雨による洪水を起した。そして天気は長続きしワンゲルの赤いユニフ



7月29日 18時 Fig 2

オームが立山をぞろぞろと歩いていたのである。二十八日頃になると立山では天気が良かつたが南方にあつた二つの台風十、十一号になり共に中厳のものに発達した。そして鹿児島、台湾を結ぶ線を通過し北上し続けて来た。又図2で秋田沖に低気圧が東進していた。そして二十九日の夕方から立山には雄大な積乱雲が発生し雷を伴つた強い夕立となつたがやがてすぐ止んだ。2図の一つの前の天気図を比べると秋田相川佐島に明らかに気圧降下があり日本海東部に中心を持つ気圧降下地域の存在を示す。それが低気圧に発達してその為に雷や夕立があつたと思われる。こういう事は夏季によくある事で、高気圧の為天候が安定していても日本海に低気圧が東進したり気圧降下地域が発生するとその附近上ではよく雷雨が発生する。従つて予測できたはずだが、何ぶん天気図だけでは資料不足で気が附いた時には雷雨が発生していた。又南方のアベツク台風は二つとも同時に北上していたが、太平洋高気圧が比較的強く西日本まで張り出していたので台風はこの高気圧の周囲を廻る一般流に流され、北西に向きを変え黄海から日本海に抜けると予測した。台風転向点後の速度増加や立山が地上より一日早く暴風雨圏に入ることを考慮して、三十一日や八月一日頃圏内に入ると予報を出した。太平洋高気圧と二つの台風による相

互運動により消滅ないし速度減少がたのみでるつた。実際は互いにけんせいの結果十一号弱りつつ北西に発進した。しかしやがて殆んど弱まりついに十号に吸収された。そして十号も弱りながらゆつくり北上し、朝鮮に上陸して低気圧に変化した。このため北アルプスでは晴天が続き台風の影響はなくなつた。このように台風が二つ以上あるときには相互運動してどれかが消滅したり弱つたりして、全体が弱くなる。予報がはずれ台風が来なかつたのは幸であつた。気象係といつても天気図を作る以外何も出来なかつた。自分がいかに無能であるかも改めて確認した。ええ、どうせ私は馬鹿ですよ、お天気屋ですよ

合宿余話

舟も揺げるような炎天下に、自分の顔など流つた事のないヲ氏と、T氏、コツフエルを持ち出して洗濯を始めた。良く見ると何と「ショートパンツ」であつた。このコツフエルで冷そばをゆでて、「うまいうまい」と舌鼓をうつて平らげてしまつた。いやはやリーダー格ともなると斯くも胃は丈夫になるものでしようかね。

台風

巨大なうずまき　左にまいたる台風　風速七十米
何百軒もはなれたところにも、水面にざわざわと風波をたてる
巨大なエネルギーのかたまり　台風ナンバー十八
人々はそのもたらす死滅に加はりたくないと　恐怖の目差しでじつと運命を待つ　家は風にふるえ　重さのないようになつて　つぶれる
叫び！　死者の怪歌
長い土は土手は　水をこらえきれず　はがゆい望もろくもくずれさる……ここでも叫び！
泥水の中に生命との闘いをくりかえすホモサピエンス
しかしあまりにも力の弱い波等　無の空間と死
自然から育くまれたものが　その生みの親の自然によつて悲哀なく亡ぼされる
自然のお遊びはあまりにも残忍冷酷だ

合宿記録

場所　北アルプス立山周辺

月日　七月二十三日～七月三十日

第一次偵察隊　六月二十二日～二十八日

第二次　〃　七月十七日～二十二日

先発隊　七月二十一日～

コース　ベースキャンプ　富山沢

1. 立山　別山乗越―別山―剱山―一の越―浄土
2. 前剱　別山乗越―鍋前剱―一ぷく剱―前剱―別山乗越
3. 大日岳　室堂乗越――奥大日――大日
4. 弥陀ヶ原散策

	D	C	B	A
23	出発			
24	入山			
25	雨のため停滞			
26	浄土○	3	1	1
27	弥陀ヶ原散策			
28	1	1	3	別山○
29	3	2	2○	3
30	下山			

○印食当

合宿役員

チーフリーダー　○高橋俊吾
サブリーダー　○渡辺享英　○吉野大次郎　浦柄栄子
マネージャー　○白井信行　平林茂
企画係　○斉藤大樹　○宮崎裕子
食糧係　○金田精彦　A藤原一博　藤原俊子　B斉藤伸一　広瀬翠子　C永田明彦　鮒田術子　洋安部多恵子　D牧原　○井上　盛斉藤貞夫
装備係　A谷　昭仁　B寺沢長子　C増田　弘　D藏田充子
記録係　井上　豊
医薬係　藤塚典明
レクリエーション係　斉藤伸一
気象係　斉藤貞夫
写真係　谷上俊三　都司直樹
広報係　斉藤大樹

○印は本部役員

隊別人名

A隊　L吉野　SL江崎

一班　渡辺(工4)　金田(工3)　岡本(工1)　矢島(工1)
二班　平林(学3)　片江(経1)　鍵瀬(経1)　山田(工1)　吉野(経4)
三班　江崎(工3)　藤部(経2)　井田(工1)　江崎(工1)　羽島(工1)
四班　平野(学3)　横手(学3)　原(学2)　塚島(学2)　所(学1)　池田(学1)

B隊　L斉藤(内)　SL藤林

五班　藤林(工4)　斉藤(伸)(工2)　田中(学2)　深尾(工1)　朝倉(経1)
六班　三神(経3)　井口(工2)　中村(工1)　上島(学1)　斉藤(内)(工3)
七班　岩上(学4)　高橋(経3)　吉田(工2)　高橋(聞)(工1)　経(経3)　高橋(剛)(工1)
八班　倉田(学4)　石田(学3)　寺沢(学2)　広瀬(学2)　田中(学3)

C隊　L米屋　SL井田

九班　塚原(工4)　井上(工3)　永田(工2)　竹内(工2)　金子(工1)
十班　永田(工3)　都司(工2)　高須(経1)　村瀬(学1)　米原(工4)
十一班　井田(経3)　斉藤(学4)　増田(工2)　田坂(工2)　向井(工1)
十二班　鍋柄(学3)　橋出(学2)　高野(学3)　鮒田(学2)　宮崎(学3)　喜多村(学1)

D隊　L渡辺　SL宮崎

十三班　宮崎(工4)　三宅(工1)　谷上(工2)　牧原(工2)　小玉(経1)
十四班　栗田(工3)　斉藤(工2)　谷合(経1)　緒角(工1)　渡辺(工3)
十五班　小杉(経3)　白井(工3)　藤塚(工3)　亀井(工1)　西田(学1)
十六班　岩村(学4)　鍋節(学3)　甘粕(学3)　鍬田(学2)　安部(学2)　佐々木(学1)

食　科　表

七月二四日			豚汁
二五日	なす 玉ねぎ 卵 みそ汁	パン ハム リンゴ	カレーライス
二六日	玉ねぎのみそ汁 清豆 つくだに	パン ハム きうり	シチュー サラダ
二七日	キャベツのみそ汁 トマト	おにぎり ハム ミカン缶	チャーハン
二八日	スウイートコーンスープ サラダ　トマト	おにぎり ハム	豚汁
二九日	なすのみそ汁 サラダ	パン ハム リンゴ	カレーライス
三十日	スウイートコーンスープ サラダ	おにぎり	

晩　40円　　昼　30円　　朝　30円

間食　30円　　調味料　20円　　150円

新人合宿

SL　工三　渡辺　享　英

今年の新人合宿の目標は、一年生に技術指導と精神的試練を与え、二年生にはサブリーダーとしての実力を養成させると共に、文化活動を合宿に取り入れて来るべき夏期合宿に高然の体制を整える事にあった。

技術指導は、合宿前に各学部で応急処置、読図、気象観測の講習会を開くと共に経済学部において設営と炊飯の指導を行い、合宿中にも機会のあるごとに指導するように心掛けたので一年生の実力は技術面で大きな進歩をとげた。

これに対して精神的な試練というのは、団体中の一員としての自覚とか困難にうちかつ精神力を養う事であるが、連日の好天、無理のない行程、整備されたテントサイト等条件がそろい　すぎていた事が逆にわざわいして大きな成果を上げられなかった。我々の活動は天候の変化とかテントサイトの状態で思わぬ悪条件におちいる事がある。この様な条件のもとでも困難にうちかつて規律ある団体行動がとれる様な自信をつけたかったのだが、機会にめぐまれず実行出来なかった。

新しくサブリーダーになる二年生はこの合宿からリーダー養成期間に入った。リーダーの仕務は全員が協調して行動するようにリードする事であり、それには完全な統率力と的確な判断力が要求される。合宿中に各々に分担された仕事を通してこの統率力と判断力が養なわれたか否かは、おそらく本人にも分らぬであろうが、秋のパート　ワンダリングには必ずその結果が現われるものと思う。今後の活動でも二年生は来年度の主催者であることを忘れずリーダーとしての実力を養うよう心掛けてもらいたい。

いろいろ問題のあつた文化活動をこんどの合宿に取り入れたのは、各方面の知識を広め山の楽しみを倍増するためであつたが、初めての試みなので単備不足のためかあまり活発な活動は見られなかつた。しかし今まで議論だけにとどまつていたものを実行に移しただけでも大きな進歩であつたと言えよう。ようやく文化活動の重要性が認識されてきたので指導法さえ研究すれば大きく発展する事はまちがいないだろう。今後の合宿にも広く取り入れられるようになると思う。

マネージャーとして

M学三　平林　茂

マネージャーの仕事とはどんなものか、いまだによくわからないけれど、主に事務手続を引受けた先の新人合宿の準備から終了までのことを思いつくまゝ書いてみる。

さて、我がマネージャーの主な任務は八〇名を無事現地へ運び、運れ出す手はずを組むこと、TSを確保し飲料水、便所等を使える様にしておくことであつたが更に重要なことは費用を極力安く済ませる事であつた。

TSの方は、宮城口にしたこともない最大級の敬語を用いた手紙の連絡でOK。

大変だつたのが交通機関。戦後復宮前の交通公社へ通つたことか。学割制度の改悪・変更なる運賃値上に対抗して、純粋に五割引の学生団体を使うことにしたのだ。我が部ではまだ利用したことがないため、様子がわからず、つまらないことをいろいろと心配してしまつた。

申請がおりたのが出発三日前。それまでビクビクして待遇んでいた五万余の現金も団券に変つてほつとしたが心配の種はつきなかつた。上野駅七時集合、遅れれば特権である優先乗車がだめになるかもしれない。指定されたありの列車が一時間半も早くなつてしまい、この列車以外には乗車出来ない。当日になつての払戻しも出来ない。安良沢で市電にうまく乗れるかわからない等々いろんな問題が出て来た。しかし、これらは日光駅で交渉した結果、市電は希望した時間に団体貸切の車輌をまわしてもらえることになり、列車の方も「指定列車以外には乗車させないという様、国鉄は不人情ではない」との事でまずは安心した。

日光―赤沼間のバスも団体貸切にしたのだが、世の中は面白いもので、こちらは普通料金より大分高い。でも大世帯であり、時間的制限もあるので五〇人乗り二台を貸切つたのだ。駅前で待つていたバスに全員乗り込んだが、さてバスは走らない。

「案内所へ寄て下さい」

「はいッ」とうつとんで行くと

「荷物があんなにあるとは思いませんでした。それにシートがこどれもし、窓ガラスも心配なので乗り換えてもらえませんか」（こんな運中に新しい車を出しすぎたとでも思つたらしい）

「はあ、そうですか。料金の方はどうなりますか」

「多少高くなります」

「カツ」と頭にきた（はじめ、学生団体は二割引ということであつたが、大学生はもう大人だからというもつともな理由によつて割引がなくなつたのにこの上……）

「シートに荷物を乗せるなと、乗る前に言えばいいでしょう！」と多少上ずつた声で言うと、

「注意しましたよ」

「それならシートには何てものせていません」と自らを切る。ずつととんち問答をしているうちに、これでもお客と思つてあきらめたか

「仕方ありません。そのまゝで結構です」

「トウゼンッ。ザマアーミロ」

「発車。オーライ」

往路はこんな調子であつた。復路は全員の奮斗ぶりしく、光徳牧場より安良沢まで平坦な道を歩くことが出来て無事、市電、列車と乗継ぐことが出来た。

ある道の道しるべ

学一　村瀬信義

男体山の地図を拡げる。赤くぬられた道、その所々に道標が立つている。ふとした時にその道標につられて散策を試みるのである。

（赤沼）バスを降る。どこからともなくいやにさわがしい音が聞える。がまず腹どしらえである。しばらくしてようやく先鋒の音が気になりだす。林中騒々しく鳴きかわしているのはヒメハルゼミのこうど。湯川に沿つての道は初めて接する風景柄とも言えないいゝ気持。白い花をたわゝにつけている森木ズミが至る所に見える。

小径が流れに沿つて右に曲り、明るい湿原の中を足元に気を配りながら歩いていると遠く、左手の沐の中からカッコーの声が耳に入つてくる。緑砂ケ原らしい鳥の声である。マイズルソウー　心臓形の葉を二三枚つけた可憐の草　で出来た小さな植物が所々に広がつている。

夕食後一息ついたのをこれ幸いに湖畔の夕暮の一時、鳥の声を求めて歩いてみる。コメツガ、サギバナナカマド、アスナロ、アズマシャクナゲ、そんな樹木が目に止り、林からはウグイス、ツツドリ、ヤビタキ、の鳴りが流れてくる。それに加えてコマドリとコルリの聞き比べをしばし楽しんだ。共に玉を転がすごとく「カラカラカラララ」と鳴ずり同者の違いは前奏曲、すなわちコマドリは鳴き始めに「ヒン」と聞る鋭な音を出し「ヒン、カラカラカラララ」となるのに対しコルリは徐々にスピードをあげつつ「チッチッチッチッチカラカラカラカラララ」と鳴ずりこの途で初めて鳴き主が判り得る訳です。

朝は一晩中鳴き続けたホトトギスの声に目が醒める。湯の周辺ホトトギスが多い様に感じる。奥白根コース

は植物にはやはり少し早いようだ。谷間の残雪上をミソサザイの明かいリズムに乗つて進み、コメツガの樹林下の小径を進むうちにアヅマシヤクナゲ、ドウダンツツジコイワカガミなどを適当な間をおいて見い出す。前白根附近からコケモモ、ツガザクラ等が目立つようになるが花はまだ早い。ダケカンバの斜面の所々にシラビソらしき針葉樹を認めつつ奥白根山頂に到着。アマツバメの素速い飛翔をゆつくり眺める。あの鋭い翼で空気を切る音が自由に聞ける楽しさ、やはり岩山の味かもしれない。

五色山への登りでショウジョウバカマとイチゴに似たミヤマキンバイを見る。又休の中の斜面では大きな二枚の葉と紫色の割に大形の花を持つたシラネアオイの小群落を見い出す。五色山からの下りでジユウイチ（慈悲心鳥）を耳にする。鳴き声に合せて「十一」とやるとよく合う鳥である。分岐を右にとり急斜面をマラソンのごとく駆け下る。みるみるうちに樹林が深まる。と目の前にかなりのアヅマシヤクナゲが現われる。この時期では二千米以上はまだ本当の春の訪づれではないらしい。斜面も増々急になり底が見え出すところになると緑の空間にオオカメノキの白い花の集まりが方々にばらまかれている。この名はやはり葉の形がカメを思い出させるような所からついたのかもしれない。エンレイソウ、コミヤマカタバミ、シロバナ（ビイチゴなどを見つつ歩くうちにすぐにテントサイトに着いてしまう。

合宿の日記

学一　須賀栄子

六月三日

記念すべき日／今日も空は晴上り上々の天気。新人の我々は重い荷物を重いザックの上に乗せられ結つて下をはいて歩く。刈込湖続いて切込湖が現れる。人のいない静かな湖、水の色がとても美しい。切込湖でしばらく休憩、白いすみれの花にうずもれる。

山王峠から光徳牧場への下りは意外に急なところ、うつかり転べない、一緒にして皆に知れわたつてしまう。これを防止せんがために手をフルに使う。ツルリ／危い／木の幹で体をさゝえる。痛い／全体重十gをかけたその木は何とトゲだらけ。救期一　知れるものは自分だけを学ぶ、大収穫。

光徳牧場はミズナラとズミに囲まれた静かな美しい森。牛の姿は二、三。そうするとファイアーの母の牛乳八十本はどこから湧いて来たのだろう？

新人合宿の記

工一　深尾昌夫

汽車の中は静かだつた。私がかつて一度だけ経験したことのある寂しさがあつた。一つのすばらしいものが終つたあとの空虚な時間であつた。

すべてのものが新しく、すべてのものがめずらしい今度の合宿に、私は全くのこわいもの知らずの態度で臨んでいた。一応練習をした設営のコトにしろ、炊事方法にしろ又全然背負つたことのないザックにしろ、それらは私にある威圧感をもつていた。しかし私のこの合宿に対する満得と好奇心は、はるかにそれらの圧力をしりぞいていたのである。

私はC隊の娯楽係という有難い役目を頂だいしていたその内容も知らなかつたし、キャンプファイアーの事もよく解らなかつたので、何を準備すればよいか、とんと見当がつかなかつたが、とにかく一つの寸劇らしきものを用意した。

その成行には内心心を痛めていたのであるが、意外意外、ワンダル精神の素晴しい一面が私の眼前に出現しようとは。私のつたない演出にもかゝわらずC隊二十名があの様に見事に行動出来るとは思つてもみなかつた。

私は例の"行動的文明批判"の講義を聞いて以来　三大要素のうち、団体行動云々が一歩先んずるのは当然の事だと思つていたが、はからずもワンダル活動の支流の支流であるかもしれないキャンプファイアーの練習中にこの団体行動の見事な一側面を触知する事が出来たのは今度の合宿の一つの成果と言つて良いのかも知れない。

すべての事が新しかつた今度の合宿で、私は多少欲ばり過ぎて消化不良になつていたかも知れないが、これらを消化していく事も又大きな楽しみであると思う。

新人合宿の日記

学二　田中豊

男体山は美しい姿を三日間見せ続けていた。どこから見てもどつしりとした落着きのある山だつた。この山を眺め乍らの新人合宿は、幸い天気も良く比較的楽に行われた。新人にとつては絶好の天気であり、それを見守る側では期待はずれの天気であつたかもしれない。

目的が計画通りに行われたかどうかは我々は知らない。我々は、あのテントというやつかいなくせに便利なものを、ザックの上に乗せて歩いたのである。何もこんな重いものを背負つて、坂道を歩かなくても良いのに、と思つたり、やつぱりこうして山の気分を味わうのも、まん

さら捨てたものでもないと思つたりした。頂から流れる汗もふかず、足下をながめつつ、歩き乍ら考えた。何のために俺はこうしてこの荷物を背負い、前と後と同じ連中にはさまれ乍ら山を歩き続けるのだろうかと。山はどうしてこんなにも人の心をひきつけるのだろうかと。

だがザックの重さが加わるにつれ、そんな事を考える余裕がなくなつてきた。同じ様な事を考え乍ら、黙々と歩いている人が俺の前にもいたかも知れない。

やはり山は実際に登つてみてはじめて、その楽しさ苦しさがわかるのだ。

容易な山から難かしい山へ、だんだんと力を貯えていく所に山登りの楽しみがあるのだろう。この新人合宿も我々新人は、もつと上級生の山に対する技術、考えを見ならい、また上級生は、我々にもつと初級からいろんな方面での事を教えていたゞきたかつた。

編集雑感

私が編集委員になつてからもう三年、その間六回の編集に関係し今回で七度目である。

編集という仕事はじみで大変根気のいる仕事である。又広告集めも非常にいやなもので、何度かこの仕事をやめようと考えたものだが、一方お互に議論したり活字とは違つた個性のある文を読むことは楽しい事である。

そんなわけで今日までやつて来たが、集つた原稿を見ているとなかなか面白い事に気づく。皆以外に古風な表現や字を使うのである。又字にその人の性格やその時の気分が表れている。しかし考えようによつてはわざわざむずかしい表現や当用漢字にない字を使わなくてもよいのではなかろうか。原稿などの時は誰にでも読みやすい字を書く方がよいのではなかろうか。更に送がなや句読点、かつこの付け方等にも注意をはらうべきではなかろうか。お蔭で編集をやつているとどんどん字がおぼえられるが、もう少し皆さんが気をくばつてくれたらと思います。実はこの事は校正をしていてつくづく感じたのであえて頁の余白をうめさせていたゞいたわけです。

（日　井）

○　オ一回卒業生よりロッカー寄贈さる

O・B便り

今春卒業された第一期OBよりこのたびスチール製ロッカー二台が当部に寄贈された。とりあえず工学部部室に置き重要な頃などを保管することになりました。

寄付して下さつた先輩は第一期生全員で左にその芳名をあげ現役部員一同から感謝の気持をささげたいと思います。

寄付者、松本、田上、皇月、小守、佐藤、吉田光、高、納、藤岡、吉田輝、吉田和の諸先輩、各千円あて計一萬円です。ホホロッカーはオカムラ製スチール、一台五千円のを二台でした。

○　O・B会創設と半歳

松本　正雄

OB会創設すなわち社会へ飛び出して早くも半年を過え、又定例の大学祭を前にして卒業後の部の歩みが見られるのを楽しみにしている。OB会員諸君もこの半年は色々と新しい仕事に毎日追われ続けであつたろうが、学生時代に培かわれ、ワンゲルで鍛えられた、頑張りの精神が変えとなつて立派に乗り越えてきたことと思う。たとえ東京、大阪、九州と別れ別れになつていても、依然としてあの懐かしいかつての仲間達はワンゲル時代の心のつながりと強固な意志の持主であることは、記念品購量等の呼びかけがあると誰一人として協力しないものはなく、いかに学生時代サークル活動に打ち込んでいたかを如実に示していて非常に心強く思つた。

早や既に次のO.B会員達も全員就職も決定し、これ所謂な精神をもつて入会することであろう。殊に地方にあつては部誌スカイライン、役員会議ニュース等でかつての生活を思い起こし、郷土にあつてもくじけず新しい明日への情熱を燃やして元気にやつていることだろう。

東京近辺のOB連は、現役とともとの日帰り等の山行、大学祭、追い出しコンパ等に参加することにより、日頃の生活から離れて昔ともに歌つた歌を声高らかに所しい世代の人達の合唱し楽しむことだろう。時は移り人が変つて来ても昔のきずなは又強と同じく緩にもがつちりとスクラムを組み、絶えることのない情熱でOB会を包んでいくことだろう。この半年はまだこれから先の輝しいワンゲルの発展と伝統の第一歩にしかすぎないのだ。

将来は関東、関西に支部を作り山小屋を建設して、各自求めたベターハーフや二世達と夕やみせまる小屋の

中で交歓会を開ける様にしたい。

あれこれと限りない夢を見ながら、私はこれからの部の発展とOB会の充実を期待してやまないのである。

今号に寄せられたOB会員以外の人にあつても連絡その他小生の不行届の為漏りが多いことを謝し、併せ小生の知る範囲の消息をお知らせする。

特に地方在住の方は出来るだけ消息や地方のニュース又卒業後の山行等を寄稿し、互いに音信を知り現役の地方への知識啓発にも役立てゝ欲しい。OB、現役を語ぶ最も大きな絆はスカイラインである。次号の投稿を期待する。

OB寸評

一〇〇二　田上栄一　経OB

六月迄実習の為尼ケ崎にいたが現在東京の家に帰り親子二人水入らずの生活をしている。勤務は高槻で京橋白木屋の裏に社屋がある。卒業後も小生と丹沢沢登りや元さんと金峰山等に出かけ主将健在。早く嫁でも貰つてやらねとお袋さんが可愛そうだ。

一〇〇三　小野三郎　経OB

卒業後何でも社用で運転免許を取り、車で都近辺を走つているとか。学生時代の調子で車を飛ばされると歩行者は迷惑至極なことだろう。うら若き女性群の中での勤務とかで本人は悦に入つているという。

一〇〇四　佐藤文雄　経OB

一年間の予定であつた秋田行も数ヶ月で終了し、東京勤務となつた。余り皆に顔を見せないのでどんな生活をしているのか不明だが、一度小生の会社のスタジオで会つた。ひどく色が黒く元気そうだつたが、次号には是非例の甘い調子の恋愛論にみがきがかつたのをひろうして貰いたいと思う。

一〇〇五　吉田光志　経OB

広島から大阪勤務となり現在西ノ宮より通勤。例の奇ぎれの長い怪男児振りを発揮して関西人を尻目に働いていることだろう。九月の連休に帰郷したが、小生勤務の都合で会えず残念だつたが大いに遊び大いに働き、野球部の花形としても注目されているとか。快男児の目覚と活躍を祈る。

一〇〇六　吉田準義　工OB

学生時代の温厚篤実な紳士も社会に出て家生活を始めると俄然積極的となり、最も信頼に足る人物の風説が聞われてきた。名古屋一西ノ宮一静岡と転々として結局静岡配属でエンジニヤーの生活を楽しんでおり、合宿後の八月上旬剣一立山連峰を夜行強行の山行をする力強い活躍をされた。名古屋では嘉納と共に歩き大いに気概を見せこれからの元気さ振りを忍ばせる。

一〇〇八　張月元雄　経OB

好漢元さんもスキーシーズンを控えて、一級の腕の見せ処と張りきつている様だ。その勇姿もスキー合宿頃には現役連に健在振りを示すことだろう。現在本郷分室で経理の仕事に励んでいる。

一〇〇九　藤岡暉生　工OB

又遠く九州八幡にあつて日本一の大企業にあつてエンジニアーの生活を楽しんでいる。卒業当初は土佐の豪傑振りを発揮して木伊乃取りが木伊乃になつてバーをつけて歩み歩いた由だが、その後余り便りがなくまさか機械の歯車にはさまれて動けないのではないだろうな。九州には山が少ないと歎いていたけれども。

一〇一〇　吉田和夫　工OB

ひつそりと横浜から石油会社に勤務され、余りお顔も拝まないけれども、大学祭には会えるものと心待ちにしている。

二〇二八　氏平裕子　学OB

OB唯一の〇〇（？）として我々より一足先きに社会人になられ、図らずも合宿の見送りに来られ拝顔したが、みがきのかかつた貫録が見られ頼もしく思つた。

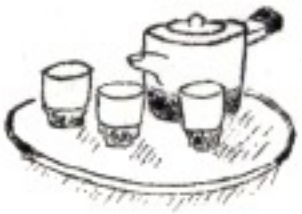
一〇〇七　松本正雄　経OB

最後に小生卒業後アパート独身生活を営なみ、その後体調悪く山行処か十四貫以下に痩せて全く昔日の面影なしといつた処。花やかなマスコミの影の戦場で今をときめく人達をかい間見て羨んでいる。テレビの舞台裏とはかくも悲哀多き処とは思いもしなかつた。健康管理等全てに思いを致しても、ぼつぼつと花嫁候補でも探そうかと考えている。

尚ここで御報告致して置きますが、記念品は今年卒業の全OBが出資して、銅製ロッカー二個を購入し九月中旬現役に贈呈しました。卒業後も形を為した我々の愛情が意々部の発展に寄与することと思います。御協力を感謝します。

雑感

嘉納秀明



ワンゲルを出てから六ケ月、まだ何も起つていない様にも思へる。春が去り夏来り、秋の初めになつても、四日市の独身寮について、相変らず若い仲間と話をしていると、会

社でも、平均年令二十三才の中で、どちらをむいても青少年ばかり、上役の圧力もさほど感ぜずにいると、急に老けこむはずはない。しかしこうしたものは、はじめ何でもないことの様にはじまり、やがてどつと盛つて来るのだろう。

わが社でもやつと最近リクリエイションのクラブをつくることになり、絵画と登山スキーのクラブに入つた。毎週一回、街のアトリエを借りてするデッサンにかよい、登山スキーでは役員で道具の買込みなどやつて忙しい。

四日市のすぐそばに御在所岳と言う一二〇〇米位の山があり、ロッククライミングの練習場もあり、又ロープウエイもつてぶらさがつているが、まだ山には一度も登つていない。暇はあつたがその気にならなかつた。けど山使りの道具は全部こちらへもつてきたし、登山スキークラブでラジウス、エヤーマット等いろいろかりられるのでこの秋から、又あるきはじめようと思つている。

一部生と逢つたのは吉田輝義君だけで彼が名古屋で実習中に、名古屋で一緒に飲んで、終電車にのり遅れ彼の寮にとめてもらつたり、彼が四日市に来たこともあつた。

十月二十二日帰宅の折に、工学部の研究室を訪ずれた、学校は卒業以来はじめてであつたが、懐しい仲間達に逢えた。我々が出てから、部は又一つ脱皮した様に思う。実動部員八十余名、部は力強くスケールを増したに相違ない。創設者が卒業して第二期が始まつたのだ、我々、一年番台の部員のえがいた夢が実現され、行動される様な時期になつた。女子は合ワンに参加して対外的にも活動をはじめ、外から部を省みる機会をもつたし、教育大との合ワンもこの秋実現する。立山合宿のパンフレットや、統図シリーズ、気候シリーズ等の印刷物などをせつせと出して部員の知識を広めているし、まさにワンゲルの隆盛期を見る思いであつた、今まで、夜を徹してまで議論したり、考えたり、実際に行動して知識を得たことが、こうやく部の基礎として確立し、こうして第二の時期をむかえて発展しようとしているのを見て、我々はよろこび、これを祝してやまない、頭はくば、更に広く求め、小さく固ることなく、新しくところみ、新しく考え更に、おのれ自身のと換すなはち「ワンゲルは如何にあるべきか」を問いつゞけ、部の領域を広めつゝ、体系化していつてもらいたいものと思う。

役員会議便り

今年の役員会議は、主将一名、副将二名、主務三名、各係のチーフ六名、二年四年代表各三名の合計十七名で構成されています。

前半期は部則、指導要項の改正、企画ワンダリングや合宿の準備を中心に討論してきましたが、出席状態は去年に比べてかなり良好で定足数の十二名をわつたことはほとんどありませんでした。

役員会議に出席する顔ぶれを見ますと、各代表の他に三年生はもちろん四年生や二年生の顔も見え活発な意見を述べています。部則によると役員会議は当部の決議執行機関であり、出席数の過半数をもつて成立することになつていますが、実際に多数決をとつた事は、ほとんどなく、話し合いによつて納得しあるいは妥協案が生れてスムースに解決することが多いようです。

後半期の役員会議はスキーとワンダリングの企画と準備の他にわれわれの部にとつてもつと大切なワンゲルの目的や活動方針、サークルとしての有り方等の根本的な問題も討論されるようになると思いますので二年生の自主的な参加が望まれます。その他来年度の予算や活動予定、役員任命についても話し合いが行なわれるでしょう。現在審議中のものとしては指導要項第八章の冬期ワンダリングの禁止事項があります。去年からいろいろ討議されてきたのですが、なかなか統一見解が生れて来ません。簡単にその問題点を紹介しますと、昨年の指導要項のままだと遭難防止が高金でない事、客観的に判断出来ない事が理由としてにげられています。その代案としてホームグランド制、半年別落制、冬山用具の使用禁止制があげられていますが、まだ決定的な案がでていません。また禁止事項設置の目的も遭難防止一本にしぼるか、雪上技術習得ムードにブレーキをかけることも含めるかの問題も簡単には解決がつかないようです。今後も冬山の危険性やワンゲルの有り方等についても長く研究し皆んなに納得のゆくような条項を作成するために努力するつもりです。

女子合ワンに参加して

学四　岩村　美智子

岸田塾が今年は担当校となつて行われる女子合同Wへの誘いの案書が、部室に舞いこんだ時から、私の心は参加することに決つていた。

ちようど、部室のノートには、ワンゲルが意識的に自分の殻にこもつていることについてのちよつとした討論があり、私自身もそれを感じていて、何とかしなくてはいけないと思案していた時であり、外へ目を向けるためのいい機会だと思つたのである。

何ら固つたものができ上つていないのを心細く思いながらも、他の大学のワンゲル生活をのぞけることに、非常に大きな期待と楽しみをかけて奥秩父丹波河原へ出かけたのであつた。参加校は、津田、中央、慶応、東大、学習院など二十八校、当ワンゲルからは二年の安藤、寺沢、三年の石田・鍋・利・平野に私の六人が参加した。

雨が辛いだつたと言おうか、小屋泊りでハイキングも中止となり、大へてしゃべり合つたのだが、私の方は失望に憂鬱になり、人と話をするのさえいやになつた。各校の人々の目信に満ちた態度、積極的な人づきあい、交換会での大胆な、あるいは機知のある出し物など、とても私にできそうもないものだつたし、今まで自分が何も（特に女子部員に）してこなかつたのをつくづく思い知らされたからであつた。

一番考えていた女子部の件では、東大と人数の少い東海大を除いて、皆女子乗や女子パーティを設けていたのが意外であつた。朝起きて髪をくしけずるのももどかしく帽子をかぶつてどまかし、お化粧もせず、重い荷をしよつて、男子部員に迷惑をかけまいとふうふういつて。そんなにまでして男子部員と協調していかなくてはならないだろうか、という疑問を持ちながらも、ワンゲルであるからには男女一緒にやつていくのが一番良いことだと思つていたし本人の目覚次第では山のおしゃれもできるであろうし私は今迄決して無理に男子部員と協調してきたとも思はないし、又苦しいことも楽しかつたと思つている。だが、人数が多くなると、どうしても女子班位は設けなければならないのかも知れない。（女子パーティを作るときは、決められた男子部員が二、三人ついていくそうだが、それでは女子パーティを設ける意味が薄れてしまう。）

又合宿先の土地でのミーティングを、殆んどの大学が、実行している。一緒に歌つたり、話したり、盆踊りをやつたり。そのための日をわざわざつくつているのである。私達のワンゲルも、何とかしてこういうことを実行し、殻にとじ込りがちな性格に、社会性を、もつと広い目をもたせたいと思う。

トレーニングもかなり厳しく、一時間も柔軟体操をしたり、マラソンにしても四十分ぐらいするという。毎日やつているが必ず出なければならないのは二百で、だいたい男女別であるが、一緒にやる学校では竜で並をつけるのだそうだ、受つたところで、早稲宮大が平一回平部宮から日光迄、夜強歩をしている。がともかく、トレーニングの少い事に当ワンゲルの活動は厳しいのではないか。正部員と準部員の基準（準部員のない学校もあつたが）及び上級生と下級生の関係は、仲好くやつてはいるが、国大より厳しそうであつた。

部内のカップルの問題も、東大や女子校を除いて、それぞれちよつとしたしとりになつているらしかつた。幸か不幸か、このワンゲルには今のところカップルはないようであるが（口さきではよく「国大の女子なんか『国大の男の子なんか』といつているが…）　私としては部員全体の調和のためには良いことだと思つている。

それから身にしみて感じたのは、私達があまりにも女性のおしゃれを恥かしく思い、それでいて行動は消極的でもつたことであつた。麦ワラ帽にスカーフや色どりのリボンをまき、ベルトやザックに小さなマスコットをつるさげ、社交性を身につけている彼女ら。何も山へいつて、わざと男のように振舞わないでも良いのだと思つた。

この頃に憂鬱になることはたくさんあつたけれど、四年間、議論してきている。男子部員と女子部員とのみは、今の状態では、決して他の大学に比べて悪い方ではなく、むしろ良いガである（フェミニストならず、横暴ならず）と知つたのは、男子部員にとつてはもちろんであろうが、私達にとつても嬉しいことであり、私達今の四年ができなかつた事は、三年生がやつてくれるであろうし、三年生もできなかつた事は二年生がやつてくれるであろう。「世代を乗越える」そうやつて少しずつ良くなつていくだろうと思つたのである。

ともかく女子合同Wに参加して、今まで内面からばかり見てきたワンゲルを、外面から眺めることができたのだつた。今後この様な機会があつたら、ぜひ参加すると良いと思う。そうする事が、ワンゲルが今の殻から抜け出していける一つの道だと思うのだ。

秋のある日誌より

YO

一日中　雨　そして薄ら寒い日
いやにひえびえとした街、湯り
細い雨足はこつそりと道端がちにみえたが冷淡だ

雨がつめたいのはずつと前からではなかつた
ついこの間までは、日差しの強さに　空気がユラユラしていた

でも今日はそうではなかつた
空気の動きが成熟している
あるものを感じて空気が動きだしたのだ

桐の大きな葉は　あばられて白い葉裏をみせる
桜の葉つぱは　もうほとんど落ちた

雨がつめたいのは　呼がきて物を冷やすため

スキー・スケート用品

ウィンタースポーツの御用は

カマクラスポーツ

Tel 4151

—貸スキー・靴—

鎌倉市雪の下369
雪の下郵便局隣

人物評

◎甘粕佐紀子

少々時代遅れの感があるかつとりした物腰、現代的ながつちり、ちやつかりした生活設定、そんなものが伴居して少しもおかしくないばかりか、不思議な魅力をかもし出しているのが佐紀ちゃんです。琴曲「春の海」を思わせるくつたくたさ、イタリヤ民謡の明朗さ、その中にぴーんと通つた一本の筋金を感じます。試験が近ずくと一言もらさず書きとめた講義ノートを貸してくれる彼女は、まさに「我が太陽」であります。

◎石田陽子

「私は山がにがて」と彼女のロぐせですがファイトは充分女子のみのテント持ち北海道旅行も彼女が先頭でしたいわゆるワンゲル的要素を多分に持つた活動家です。今日は分校の図書部、明日は神田の古本屋と専門書あさりに急がしそうですが、部室にきては下級生の相談相手でもあり、色々適切な助言も与えて下さる人です。

◎井上馨

通称ノンちゃん。ワンゲルの世帯道具を司どる長官。経歴は不明。しかしノンちゃん城に乗る如く、妙なエリートぶ識を持つて雲霧の頂きに立つという人ではなく、人里離れた淋しい高原とか半島・島などをあてどもなくさまようといつたワンゲル内の消遥派。ノンちゃんは静かな人です。粘つていても何でもやつてくれます。自分の利益名誉を求めず人のためにつくす人です。ノンちゃんのそうした性質に、ひそかに思いを寄せている女性がワンゲルにも何人かいるのではないですか。

◎江崎伴雄

数少ないワンゲル模範生の一人である。まじめで秀才でしかもイイ男とくるからもうジンときちやうね。　とにかく電気事政である彼の真面目ぶりはそれこそ　インビーダンスが彼の郷つている唯一のダンスだ　とでも言おうか。まあ彼の前でエロッ話など決してできない。山テニス、スキー、スケートと何をやらせてもできるタフなお兄さんでもある。特にスキーがおスキでスキー合宿に行けば「えゝ山回りとどゞーい、谷回りとどゞーい」

とガッチリコンと教えてくれるから一年生諸君は御期待のほどを。

◎桂　野　精　司

うわあ、俺は桂野だあ。丹波のささ山に生をうけて、いまは寮に住んでいるが、皆おとなしくていい奴ばかりで、かわったのもいねえし、なかなかおめえ住みいいわ。夏の合宿には疑似赤痢なんてえれえ病気にかかっちまって、参加出来なくて残念だったな。でも又、行く機会はいくらでもあらあ。まあワンゲルにいるんなら俺みてえに病神をず太くきたえた方がいいぜ。一度夜にでも寮に来いよ。飯盒で米をとぐ音を聞かせてやらあ。

◎金　田　精　彦

ゴーハンダ、ゴハンーダ、サアータベヨー、風ハ……：　合宿で食事になると必ずこの音頭を取る、之が金田さんです。あの面倒な食料係の長官として、合宿になると鄭子書迅の大活躍、そして常日頃は部室で顔を合わす度に、部費の催足。全く会計係とは辛い立場ですよね。

ヤンタ　ミヤマクロスケ　鈴岡土人　等々　愛称の数ではワンゲル広しと言えども、一、二を争う……いやー、之は関係なかったかな？

◎栗　田　武　寿　郎

いつもにこにこして誰かまわず話をし、彼独特の話し方にも親しみがわく、おとなしいが実に気楽な面白い人である。「たすけてちょうだい。彼は甘い歌で私を悩ますの。助けてちょうだい。彼はいくらでも食って食当を悩ますの。助けてちょうだい。彼はしないで私をぶっていじめるの。」趣味は食う事と、甘い歌謡曲。特技は食う事と、甘い歌をうたう事。それに何事のたしなみがあるから御用心。

◎腰　塚　典　明

雨ニモ負ケズ　風ニモ負ケズ　雪
ニモ夏ノ暑サニモ負ケヌ　丈夫ナ体
ヲ持チ、毎日せっせと通学する様は金次郎を思わせる。がっちりした体格に反して、自分の意見を打出さず、とつそり胸に秘め、いつも静かに笑っているところは、金太郎的である。しかし頭髪は寒いから、金恒様とは違う。服装は、かけた方が素適だという人とかけない方がハンサムだという人が対立している。

◎小　杉　貴　一

「俺」を連発するワンゲル男性群の中にあって「僕」を堅持し、相手を呼ぶときに、必ず、「君」をなんてところは立派ですね。ところが、神様は何と皮肉なんでしょうね。こんな優しい心を持つ小柄な彼をして、かくもすごい大食漢たらしめるとは。きっと、「シゴ」がしっかりしていて、がんばり屋であるからでしょう。ワンゲル活動には、もう一押しの積極性が欲しいという人もいるけど、彼は「恥かしさ」を知っているんですね。

◎斉　藤　大　樹

ある会話

「ねえ、あそこにいる方、えゝと、言語の……」
「大樹ノワンゲルの二代目大チャンだよ。部の企画係をやっていて、皆をコノ世ノ物トハ思ワレナイ所に連れて行こうと苦心しているんだって」
「そうね、あのタイプは山向きね、髪の毛なんか大分のびていし、オヒゲもチョットね……」
「ウン、それでいて、なかなかのクラシッタ趣味で、何やらギーコギーコやっているんだ。とつつきにくそうだけど、話してみると、とても面白い人なんだ」

◎白　井　信　行

たてから見たら長い男、横から見るとなお長い男、後から見れば、もはや定型なる男性美。　一見、にがみばしっているけれど、その心のやさしさ、気高さは、エーデル・ワイスのよう。　力があって、その上料理のうまさはワンゲル一、　虚弱的亭主になりえる資格十分。　頭の切れもたいしたもの、わが部が誇る優等生これでは、女性ならずとも、ついホレボレしてしまいますね。あなた。ねー。

◎鍋　柄　栄　子

「山猫は小粒でピリリと辛い」この言葉がピッタリのクリクリとしたいわば　クリチャン　という感じの波女身体全身から溢れ出るファイトと実行力の持主のスーパーレデー（但しワンゲル活動にかぎらない）
山においては山女でっり、学校においてはしとやかな女子大学生、部室へお花を持って来て下さるのも、又部室をきれいにしたり部室にウクレレを持って来てハワイアンを聞かせてくれるのも、時には弘道下級生の頭んでいることを指摘しはつきり言って注意してくれるような女子部員にとって、かけがえのないお姉様であると同時にワンゲル部にとって良きベターハーフである。

禁止事項

工四　藤林　徹

秋も深まり冬期ワンダリングのシーズンが近づくと、個人の冬山ワンダリングが役員会議の席で問題となるが、冬山を含めてのワンダリング禁止事項について考察する必要がある様に思う。

山を眺めこれを踏破してみようと思う気持は純粋なワンダラーのものでありそれに喜びを感じ得られることはワンダラーの一つの特権でもある。この純粋な気持をいかなる社会と言えども踏みにじるべきではなく、特に自然を尊び自然に敬愛の感を持つ者の集りである当部に於てこの気持がいかなる型に於ても失われてはならない。さらに当部は個人の警察と責任の上に組立られ、個人の自由主義が発揮された時初めてその価値がある。個人の特徴あるワンダリングが各自の責任に於て当然なされるべきであり禁止事項等を設けてそれを組み一つのわくの中に帰省することは大きな間違いであろう。

私がこの様な考えからある程度危険視されるワンダリングを計画しようとしたとき自分の気持に純粋に従うかと言うと必らずしもそうではなく先づ自分の経験と体力以上のものでないかと考えるし、その危険が降りかかつたときに影響を及ぼす社会のことも考えさらに自然を愛する者の感度に従つているかとも自問する。危険視されるワンダリングを計画する場合に特に注意されるべきことは、この種のワンダリングに対して生半過な観念的知識しかもつていないことである。と言うのは当部に於てこの種の危険に対する行動の取りかたは全然教えていないし当部が今までの方針でこれらのことが非想的に考えられて来たことも原因の一つであろう。この生半過な経験と知識で危険性のありうるワンダリングを行う事は歯科医が盲腸の手術をする様なものである。易しく言うならば通常当部に於て行われている企画ワンダリングと横嶺剣のワンダリングとは歯科医と外科医の程度の差があると思われる。歯科医でも盲腸の在り場所は分るがその開腹術を知らないと同じ様に我々の知識は夏山のものであり、山の美しさは知つているがそれを冬に登る知識と経験はない。この様な理由からある計画がこれらの一つにでもひつかかるならば私は自分の未熟さを認めてこれを中止するであろう。

ところで部員全員が合理的な判断を個人ワンダリングの計画中に持つかどうかを考えると必らずしも肯定しかねるのが現状である。特にワンゲル生活の経験が浅く技術的な事を修得するのに一生懸命な低学年の部員には一種の情性とも言える自己満足の為の英雄主義が判断を誤らせる事があるのではないだろうか。山の魅力に引かれてと言うのがこれに相当するものと思える。

これらの誤つた判断を持ち易い事を部と言う指導標で導く必要がある。ここに禁止事項の必要性がありその存在価値があろう。前節で自由主義の尊重を説いたがあくまで他人の自由を尊重して始めて自分の自由が存在すると言う鉄則を当部内にも適応させる事が必要である。この為に指導標的役目をする禁止事項が必要であり危険性のあるワンダリングを規制することが必要である。

この様な考え方から禁止事項が生れたのであるがこれに対する部員各自の心構がさらに重要である。低学年の部員は個人のワンダリング計画が誤つた判断の基に出来ていないかをもう一度考え直して提出し、これを受取つた役員会議は安易な事をかれ主義で禁止を行つてはならない。部則を始め全ての当部のルールは部員にけむたがられて敬遠されることなく、部員の総意で育て上げられなければならない。

＊　＊　＊

ヤブカ

ヤブカ　黒いヤブカ
おまえは私をさした　鋭い針で私をさした

素ばしこくて　精悍に飛びまわる
おまえは多分　自分の事を勇ましいと思つているだろ
だけど私はおまえにさゝれるのがいやなんだ
おまえがすばしこい程　憎くなるんだぞ
こいつめつ　エイツ

ヤブカはつぶれた　赤い血をはきだして

個人ワンダリング

――八方尾根――
八方尾根漫遊記

工三　江崎伴雄

「五月の連休は山スキーを。」というのが斉藤大チャンと僕の合言葉になったのか、去年の要領に続いて今年は八方尾根へ出かけた。（来年は月山あたりか）五月の声を聞くとこの長い下駄をかつぐ姿もめっきり少くなったその新宿駅を後に21.30。こまくさ。と称する車で一路信濃四谷へ。駅から二十五円払うとほんのセベ分バスに乗せてくれ、着いた所は細野。これより五分程テクるとケーブルの駅に着く。ケーブルは七時にならなければ動かない不精な奴。黒菱小屋は宿泊を申し込むと一言で○ぴさぞかし混むだろうと期待（？）して行ただけにいささか拍子抜け。ゲレンデでは三々五々戯れている暇人相手に二人用のTバーリフトが荒稼ぎの真最中。雪質も沢山の人々が滑り降りて固めてくれた場所を除いては柔く、転びに来た初心者以外にとってはコンデイションは悪い。初日は一日中ガスと雨の悪環境に悩まされ、午後は早々に切り上げてしまう。翌日も同様降ったりガスったり。雨の合間を縫んで滑りまくっていると「そのYWVの赤シャツには去年秋に上高地や奥穂父でお目にかかった」。と嬉しい事を言ってくれる御仁があった。（心当りの人は手を挙げて下さい）これを聞いて我ワンゲルも全国的になったものだと心中密かにほくそ笑むのは嘉納さんだけではございますまい。さて我々の滞前はというと二日かかってどうやら以前の実力を取り戻した程度でその日もおしまい。唐松遠征は最終日の明日に延期される。明日こそは晴れてくれと神に願かけたかいあったのか翌朝五時頃大チャンの「晴れているぞ」という軽やかな声（？）に安眠を破られる。しかしややもするとザしゃかつかりした大チャン、再びふとんを被ってグー。朝食後すっかり諦めて時刻表まで引っ張り出した時、神は我々を哀れと思召された。やや晴間も見えてきたので

「よし行ける所までも」と8.10. 黒菱小屋を後にする。第一ケルンまで25分強。眼前の白馬方面の銀白の中に無残にも幾本かの黒い筋の入った山肌を見つめながら「この天気何とか今日一日保ってくれれば」と案じていた。しかし動き出すと又パラパラと来たりして「これは駄目だ」と不安になりつつもなお前進する。約20分程で第二ケルン（実は第二ケルンの本物はこれより五分程先にあったのだが）ここで「これ以上スキーをかつぎ上げても無駄だ」との事でデポ。なる程尾根の真中つまり登山路を黒い山肌が露出し、能なき岳人を誘い込むが如く上方のガスの中に消えている。

又15分もすると第三ケルン。猛烈に強い風に、ここでもう駄目ではないかと思ったりしたが「エイもう少し」と再び歩き出す。パラパラときたかと思うと、やや明るくなって、そんな時には白馬三山が三つきれいな白頭を揃えたり、左手の五龍・鹿島槍の頂上まで見通せたりでガスの動きも目まぐるしい。やや行くと頭上は全くの紺碧となり、その代償にか強風が我々に「帰れ」とどなっているかのように強烈に、冷たく襲いかかる。あまりの強さに又してもこれは駄目だ」とつぶやいたのは大チャン。それでもいつの間にかアイゼンを結びつけて歩き出していたのは執念とやらのなせる技か。

雪くすると鋭く切れ落ちたキレット、不帰と続く左手にようやく目指す唐松が見えて来「これは行けそうだ」との気持になる。かれこれして意外早くひょっこりと唐松小屋の前に出、昼食前は頂上で感激の握手。時に11.55。しかし神はそれ以上に譲歩して下さらなかった。仕方なしに記念撮影だけで早々に引き上げる。上空はいつの間にか曇っており、強風は相変らず身を引きちぎるようだ。唐松小屋へ着えるように転がり込み、熱いお茶をもらってやっと一息、即昼食にかかる。この小屋での甘き苦い出を一つ。というのはちょうど小鼓に居合わせたちょっときれいな大阪娘が、恥かしそうに俯きながら僕にウインクを送ってくれた。……と思ったのはこちらの錯覚か。……当然。

食後外に出ると最早白いものがパラつきだしており「これはまずい」と魚を盗んだ猫のように一目散に逃げ下る。途中から雪は霙・雨と多彩な変化を見せる。我々の歩行も寒さに震えて待っていたスキーの所へ帰り着

の塩やきをして、浜風にふかれつゝ夕食をしていると通りかかつた人が、夜の引潮の時にタコがよく水ぎわまでやつて来ると教えてくれた。そこでマキの長いのを探し先をとがらしてモリのかわりにし、引潮の時に懐電を片手に、棒をもつて海岸を歩きまわつたがどうしてどうしてタコなんかいやしない。何の収獲もなく終つた。

一九日。最後の晩だから八丈の人とじつくり話そうと昼頃テントをたゝんで、浅沼さんに八人でおしかける。ところがところが、暗くなつてもなかなかおじさんが帰つて来ない。おかげで夕食をいつまでもおあづけ。イモショウチユウをごちそうになつたがその強さにびつくり八丈の人にとつては情島というのが自慢らしい。私の生きているかぎりはと情島をおしとうす気はく十分。八丈民謡ショメ節を何度もきかせてもらつた。夜半すぎにすごい夕立。強風注意報がでているときはこんなものかと驚く。

夜があけて甲板に出たがまだ大島附近。東京湾に入つてからの船足のまだるつこさ。十時半にやつと東京港に着く。長らく電車という乗り物をみなかつたので浜松町から乗つた電車の方に酔いそうだつた。

九　州

霧島決死の縦走

工二　谷上俊三

その日は朝からすばらしい天気だつた。昨日の暴風雨など思い出す術もない。三人晴々とした気持でエビノ高原を出発した。ペースも快調、知らぬうちに霧島の最高峰韓国岳の頂上に着いた。何と素晴しい眺めだ!! 足もとは全て飛込めばふんわりと受けとめられそうな、真白な綿のような雲海につつまれ、その綿を突き破つて周囲の山々が頭を出して、僕達に微笑んでいる。北は九州中部の山々、南に大隅半島の山々が望まれ、その奥に桜島が平和そうにプカプカ煙をはいている。その横には小さいながら富士山のように美しい開聞岳が、真青の空と真白の雲海をバックに美しく輝いている。

さて時あたかも南九州一帯に地震続発の折。宮崎や鹿児島でも相当の被害があつたとか。確かにエビノ高原にいたときも、日に数回ドカン、グラグラと来て感じのよいものではなかつた。調査の結果、縦走路中の新燃岳が震源地であることがわかり、大爆発の恐れのため登山禁止となつていた。この山は十年位前に大爆発を起し、山麓のつつじが全滅したという因縁つきの山である。さて天気は最高、計画では縦走することになつている。しかし地震も続発し、登山禁止という。そこで三人で三巨頭会談を開いた。「さてどうしようか」その時そばにいた三人づれ（どうも兄貴と弟と姉の組合せらしい）が、「縦走するのでしよう。私達も行くのですが、いつしよに行きませんか」「でも登山禁止だし、爆発の危険もあるでしよう」「いや新燃はいつもこうですよ。ただその時によつて禁止区域が五〇〇米になつたり一〇〇〇米になつたりするのですよ。」とこの言葉がきいた。二人の意見はまとまつた。他の一人はしぶしぶこれに従つた。

この快晴の下に、その三人づれと、僕達三人が縦走路に入つた。韓国岳頂上の人々は何か変な目で見ていたが、人のいない静寂の山へ入つたので、何と気持のよいことだつたろう。獅子戸岳の前で昼食、獅子戸岳で一腹。さてこれからが新燃岳である。あの三人づれは僕らの昼食中にもう見えなくなつてしまい、残るはジリジリと肌に感じる光線と、不気味な静寂と、僕ら三人だけだ。さて出発。他の二人はどう決心したか知らないが、僕は神風特攻機に乗つたような気持でザツクを背負つた。さあ決死隊の出発だ。皆不思議と無口になつた。黙々として

の塩やきをして、浜風にふかれつゝ夕食をしていると通りかかつた人が、夜の引潮の時にタコがよく水ぎわまでやつて来ると教えてくれた。そこでマキの長いのを探し先をとがらしてモリのかわりにし、引潮の時に懐電を片手に、棒をもつて海岸を歩きまわつたがどうしてどうしてタコなんかいやしない。何の収穫もなく終つた。

一九日。最後の晩だから八丈の人とじつくり話そうと昼頃テントをたゝんで、淺沼さんに八人でおしかける。ところがところが、暗くなつてもなかなかおじさんが帰つて来ない。おかげで夕食をいつまでもおあづけ。イモショウチユウをどちそうになつたがその強さにびつくり八丈の人にとつては情島というのが目慣らしい。私の生きているかぎりはと情島をおしとうす気はく十分。八丈民謡ショメ節を何度もきかせてもらつた。夜半すぎにすごい夕立。強風注意報がでているときはこんなものかと驚く。

夜があけて甲板に出たがまだ大島附近。東京湾に入つてからの船足のまどろつこさ。十時半にやつと東京港に着く。長らく貨車という乗り物をみなかつたので浜松町から乗つた貨車の方に酔いそうだつた。

九州

霧島決死の縦走

工二　谷上俊三

その日は朝からすばらしい天気だつた。昨日の暴風雨など思い出す術もない。三人清々とした気持でエビノ高原を出発した。ペースも快調、知らぬうちに霧島の最高峰韓国岳の頂上に着いた。何と素晴しい眺めだ!! 足もとは全て飛込めばふんわりと受けとめられそうな、真白な綿のような雲海につつまれ、その綿を突き破つて周囲の山々が頭を出して、満面に微笑んでいる。北は九州中部の山々、南に大隅半島の山々が望まれ、その奥に桜島が平和そうにプカプカ煙をはいている。その横には小さいながら富士山のように美しい開聞岳が、真青の空と真白の雲海をバックに美しく輝いている。

さて時あたかも南九州一帯に地震続発の折。宮崎や鹿児島でも相当の被害があつたとか。確かにエビノ高原にいたときも、日に数回ドカン、グラグラと来て感じのよいものではなかつた。調査の結果、縦走路中の新燃岳が震源地であることがわかり、大噴火の恐れのため登山禁止となつていた。この山は十年位前に大爆発を記し、山麓のつつじが全滅したという因縁つきの山である。さて天気は最高、計画では縦走することになつている。しかし地震も続発し、登山禁止という。そこで三人で三巨頭会談を開いた。「さてどうしようか」その時そばにいた三人づれ（どうも兄貴と弟と師の組合せらしい）が、「縦走するのでしよう。私達も行くのですが、いつしよに行きませんか」「でも登山禁止だし、爆発の危険もあるでしよう」「いや新燃はいつもこうですよ。ただその時によつて禁止区域が五〇〇米になつたり一〇〇〇米になつたりするのですよ。」とこの言葉がきいた。二人の意見はまとまつた。他の一人はしぶしぶこれに従つた。

この快晴の下に、その三人づれと、奥様三人が縦走路に入つた。韓国岳頂上の人々は何か変な目で見ていたが、人のいない静寂の山へ入つたので、何と気持のよいことだつたろう。獅子戸岳の前で昼食、獅子戸岳で一寝。さてこれからが新燃岳である。あの三人づれは奥らの昼食中にもう見えなくなつてしまい、残るはジリジリと肌に感じる光線と、不気味な静寂と、奥ら三人だけだ。さて出発。他の二人はどう決心したか知らないが、まは神風特攻機に乗つたような気持でザックを背負つた。さあ決死隊の出発だ。皆不思議と話口になつた。黙々として

素晴らしいペースで歩いた。新燃の厳しい登りも、爆発したらもうおしまいという恐怖の中で、疲れも忘れガバチョ登り切った。ああその火口の広くて綺気味なこと。遠くの来たのを待ちかまえていたようにぽつかりと口をあけ、その底に何とも言えぬいやな色の池があり、静寂の中に、熱気の音だけがシューシューと悪魔の叫びのように響いている。さてここから火口を半周して向う側へ下らねばならない。その間に爆発したら……そう考えただけでもう足はどんどん歩いていた。時計とにらめつこしながら、何時に爆発するなど決つていないのに。いや時計が気になる。疲れなど問題ではない。快調なペース。よく考えてみると今日はまだ地震を感じていない。するともうそろそろドカン……タワバラタワバラ。そんな考えだけが頭に浮ぶ。その時どうも調査機と思われる軽飛行機が一機飛出し、すごい低空飛行で我らの頭上を何回も旋回し出した。調査をしているのだろうが、まるで爆撃に警告しているように思えるし、そのいやな騒音と蒸気の吹き出す音、暑い太陽と静寂。どんなに他のことを考えようとしてもますます恐怖心がつのり、冷汗でびつしより、足は遠くなる。疲れは忘れたといつても、この長く感じられた時間のため精神的に閉口した。やつとのことで下り口についた。三人ともグッタリだがまだ火口である。これを早く降りて向う側の中岳へ登らないと安全ではない。まあせつかく命をかけて来た山だからと皆思い思いに写真を撮り、火口を走り下つて中岳へ一気に登り

無事に難関を切り抜けたと知り、グッタリと休んだ。獅子戸岳から新燃岳を越えて中岳へは、コースタイムで一時間二〇分のところ、ノンストップ一時間で走破した。そして無事為千鶴河原にテントを張つた。

さてその新燃岳は、今でも地震は起しているそうだが爆発はせず、我らの恐怖の疑走も空回りした結果となつた。しかし今でもその時の必死の状態を三人寄つて話しては、大笑いしている。恐怖から脱出した気分は、笑わずにはいられないものですね。また新燃岳で、各自思い思いに撮つた写真も、さて現像してみると三人が三人とも失敗という結果。恐怖さのあまりよく露出を決めず、構図もでたらめに撮つたということ。これもまた大の男三人の肝玉の小ささを暴露したことになり、大笑いだつた。最後に法を犯して危険な登山をしたことを、この紙面を借りてお詫びします。

〝の と〟

能登島

学二　寺沢　良子

私達総勢20人、まだあたりが薄暗い中を切符売場からの光をたよりに、シュラフをザックに詰め、眠い目をこすりながらこれからの旅に胸をふくらませ、改札口に立つたのが4時半頃でした。途中津幡駅で乗り変え、七尾駅で降り、淋しつぽい町を汗をふきふき海の塩の香を嗅ぎながら着いたのが、能登島への船着場、ここで朝食をとつたこの時食べた握りいかのしこしこした感触が、何とも言われないこれからの旅のもしさをおもわせるようでした。いよいよ船に乗り日本海へと、太陽の光と熱を海の塩風でやわらげながら出発しました。すると上級生の日さんがニヤニヤ笑いながら釣竿におもりをつけ始めました。夕食のおかずに鎌を釣つてくれるというのです、しかしその釣竿は七尾で百いくらという値で買つたものだと聞いた時、私達皆、「期待しないで待つています」帰笑い冗談を言つている間に、第一日目のテントサイトである能登島に着きました。両舷を真青な海がとり囲み、松林にかこまれた砂地にテントを張り木陰で冷なぎをすすつた時、山とは又違つた海の雄壮味を満喫しました。食後塩風を受けながら松林を抜出て、海辺の岩角に座つた時、涼きと暮とびとうれしさで胸がいつぱいになつた。「何んて海の色がきれいなのだろう、こんな色をエメラルド色というのかしら、深い緑色を含んだつやつやかな、それでいて透通つていてさらつとした感じの青」海抜三千米から〇米、山と海、止めどもなくいろいろな思いが次から次へと出て来て、しばらくの間我を忘れて幽玄感にひたつていました。丁度皆も昼寝からさめ、泳ぎ始める時だつた。私達も水着に着替えて岩で足を切らない様に海に入つて行きました。泳がなかつた人達も岩かげの小魚を追つかけりして楽しく時を過しました。泳いだ後木陰で昼寝し、そして向田の火祭を見に行く私達の為に、夕食を早めに食べました。はじめて食べた「はじめ」というお魚のおいしかつた事私達約半数は4時頃横貫を持つてテントサイトを出発しました。

風の話　（向田の火祭）

工一　鑪井　良英

私が海岸の景色の良い松林を通つた時ひょいと下をみると黄色のテントが張つてあり、十人位がいゝ気持で昼

寝していたんです。私もついうとうとと……

騒ぎ声で目をさますと連中がお祭りを見に出かける様子。私もつい一緒に見物に出かける気になつたんです。

十キロの道を行つてやつと神社の前に来ましたが子供が二、三人いるだけで祭りが何時始まる事やら、神主に聞くとその内皆が集まれば始りますよと呑気な事を言つている仕末でね。

この能登島、向田の火祭というのは数百年前からの奇祭で三十米位のワラや竹ススキで塔を作り、塔の上から四方に太い縄を張りこの塔に若者が回りを廻りながら火をつけ縄を引き合つて塔の倒れた方向で今年の豊作を占うそうです。

三時間位で祭りが始まり神社から大きなキリコやミコシが塔の方へかつがれて行きました。神社の屋根から見ると暗い道を幾筋も火がゆれ動いているのはきれいなものでしたよ。その内に若者が手に手にタイ松をかざして塔のまわりを七回まわりときの声とともに火を塔に飛込むと一時にあたりは明るくなり天にとどくかと思われる炎が夜空をなめまわし火の子はあたり一面両国の花火の様に飛散り呼々火のついたワラ束が塔より焼け落ちる様は壮観そのものでしたよ。塔が倒れると若者がかけ寄りかけ声も勇ましく縄を引合う光景はさながら　絵の様とでも言うのでしょうが絵にも書けないすばらしさですよ。でもね、あの美しく壮大なながめには私の仲間等が火の子を夜空に舞上げ炎をちぎれる程吹き飛ばした風の力も手伝つている事を忘れないで下さいね。

それから波らはどうしたかつて、どこからともなく現れたとしか形容出来ない群集の中で見失つてしまいましたが、私が帰り道、や／失礼。帰り空で見たオート三輪に乗つて舌をかまないように歯をくいしばつていたのか使らだつた様ですよ。暗くて確かじゃありませんがね。

九十九湾

工四　塚原　伸一郎

九十九湾と書いて「つくも」湾と読む。能登島から船で二時間半、能登半島の東南に位するこの湾は、佐渡のそれと同じ名の小木というわびしい漁村の海辺一番をいう。一昔前までは豊漁でにぎわつたらしい村も今では全く見るかげもなく、目抜通り？にぽつんと立つ一軒のバーの看板も何かちぐはぐな感を与える。能登半島の町全体に言える事だが、その経済形体が完全に消費部門に偏している様だ。漁業地は奥端に位する日和山公園内、国鉄のキャンプ場に指定されており水場には苦労しない。海岸の遊船場で材木を買い燃料にする。久し振りの風呂

で皆の顔爆顔とり本来の素肌が表れて来ました。近来の値上りムードもまだここへは押し寄せて来てはいないらしく一杯十五円也の水を皆でむさぼり食う。相変らず蚊には悩まされ日本脳炎にでもならねばこいがと思いながら眠りに就く。翌朝早く海辺へ海の幸を求めに行く。不漁を嘆く漁師の言葉通り網にはたいしたものはかかつておらず約2Kgのたこを二九〇円で求め丸ゆでにして食べる。食うたらにテント地を移りしている？との噂見もある通り、朝食もそこそこに次の目的地「狼煙灯台」へとバスに乗り込んだ。

輪島の朝市

工一　諸角　壮七

輪島着七時三十分。人通りの少ない駅前通りをしばらく行くと突然ざわめきが聞えてきた。お宮の前の道路の両側にゴザを敷き、野菜、果物、魚、雑貨等を付近の村から集つた百姓や漁師のお神さんが売つている。全部自家製らしく一種か二種類の品が置いてあるだけである。一日の売上げは二、三百円で後は物々交換との事である。夕方にもこんな市が立つそうで町の人は朝夕この市で買物するので魚屋と八百屋が一軒もないそうだ。

さてりんごを買うことになつたが「三個二十円のりんごを十九個ではいくらか？」

この問題が買手のポケタ頭と売手の素ボケな頭ではなかなか解けない。

結局十八個分の金を払つて一個まけさせけりがついた。

ずぼら会計になるの記

工一　岡本　平雄

準備会で藤林さんから会計係をおおせつかつた奥、請求があつた時、ポイポイお金を出していればよいのかとたかをくくつていたらとんでもない。まず富山での買出しで今まで持つた事のない大金を持つてボーとしていた奥に、「〇〇円くれ。」「〇十〇円のおつり。」と、あちこちからゴチャゴチャガヤガヤ、それでも能登島、小木、狼煙、と大した失敗もなく、ここまで狼煙を発つ時ノートを忘れついにオッチョコチョイの本性発揮、せつかくこまごまと買物を書いておいたのに、と大いに落胆、その後、失敗はなかつたけど、旅も終りに近づいた頃からが大変、皆いいも持で寝ている汽車の中で、井田さんに「沢山残さなければだめだぞ。」とやいやい言われ乍ら、乏しい懐具合の計算。お金のないという事は何と淋しい事よ／やつと皆に百五十円返す事が出来、ほつと胸をなでおろし、東海道はグッスリと眠りました。

能登の日記から

工一　須　尾　昌　夫

V君。能登ワンダリングも明日一日でおしまいだが、なんだか憂うつでたまらない。新人合宿の時の様にワンダリングの終る事を惜しむ憂うつさとは違う様だ。夕べ皆々木海岸で行なつた反省会の時の事が妙に頭にとびりついている。上級生のほとんどが、今度のワンダリングの不成功に口をそろえていた。大部分の一年が能登秘境の秘の字にひかれてワンダリングに参加していた様に僕も今迄とは何か違うものがある様な気がしたので参加したのは分つているだろう。事実「秘」から受ける感じとは、かなりかけ離れたものだつたが、バラエティの豊富さに於ては十分満足させるものがあつた。だから上級生の失敗説に対して僕は少なからず不満を感じている。

V君。もう八月も終りだ。合宿の為、たまつたバイトの消化に少々バテ気味だ。能登を楽しかつたと思おうとする反動なのか、上級生の言葉が鉛い圧力を加えてくる「テントを持つて移動してゐるだけじゃないか」「もう少し能登の人の善意にふれる事が出来ると思つていた」「お前は何を学ぶ事が出来たのだ」いずれも僕の軽薄な満足に鋭い攻撃を加えてくる。僕はただ未経験の生活に酔いしれていただけらしい。頭の中に凝結している何物も無いのは隠せない事実なのだ。自分の理想の低さ、小さな満足に対する憤まんの為、この種のワンダリングがいやになつた。悲しくなつたのだ。

V君深けて来た様だ。分つてきたんだ。すべてを肯定しないと気が済まないいつもの癖がそうさせたらしい。ただ泳ぐだけで得られる山の素朴な喜びとは違うのだ。四時間のボッカにたえて、遠くに目分達のテントを見つけた時の気のぬけるような快感は所詮長のないのだ。能登で得る喜びは、決して受身的な感況にはやつてこない。強く積極的に求めなければ、失望に終るのは当然なのだ僕は下調べすら十分でなかつた。人の心に触れようとする姿勢だつて出来ていなかつた。ただ新奇な生活にのみ酔つていては駄目だ。もう一段上の喜びがあるのだ。或いはそれは汗で得られるのよりも困難なものかもしれない。しかしそれが素晴しいものである事は確かだろう。V君。僕はまだこの種のワンダリングを人に勧めるだけの自信はない。経験もない。しかし勧める事が出来る様になりたいとは思つている。

能登でのお話

工三　井　上　豊

○ 船の上にて。海は静か、客は少ない。甲板を独占。この小舞台で演芸会。手拍子高く歌つたり踊つてみたり船足も軽かつたようです。

○ ある港についた時。停船時間を利用して絵の菓子屋へとひとはしり。あとはのんびり甲板でアイスクリームを食べました。

○ 七尾にて。桑りとみえる。川端に遊廓がずらり。これに絵入りの川柳がかいてある。その一つに「夫より長い娘のスラックス」

○ 能登島にて。夕立にせきたてられて大うわてのバッキング。やつて来たと思つたらすぐやんじまつた。そこでドタグツ、ムギワラ帽のいでたちでソフトボール。マフゲーユヤエッコラセと投げるボールをハカリかつぎの棒でたゝく。空中をとべば松の木にぶつかつてあらぬ方向へコロコロ。ころがせば草の中にストップ。暑いタッをひきずつて大奮闘でした。

○ 狼煙にて。ある御人の誕生日。お祝いをかねたキャンプファイア。家政科のお姐ちゃん達、金沢の高校生も飛び入りしてにぎやかに。ケーキがわりにコッペルに小さなローソクをたててスタート。十日以上もザッタにしのびこんでいた花火も一役買いました。

○ 飯田にて。接岸で潮風にふかれつゝ昼食。ひまをみつけて、七尾で買つた釣り道具をひろげ海にたれたある御人。針にかかつて一匹上つて来ました。あつと言う間に昼食のおかずに早がわり。これが最初で最後でしたつけ。

○ ワンゲルにデバ迅丁のあるわけがわかりました。三度も魚の料理をしたのですもの。どもあまり大きいのは料理する方がこわいみたい。

○ 骨ヶ木にて。そなえつけのテーブルで夕食をした海人達。いつまでたつても腰をあげない。翌朝は三時半起床だと言うのにいゝのかしら。ぼちぼちもう十一時ですよ。

○ 猫魔湖長浜にて。ある時に大仏があつた。テントより約骨雲の方がと、大仏の後より内に入りこんだ御人たち。翌朝出てきた時の番ばしかつたこと。

○ 帰りの列車に詰し入れ。一足先に名古屋に行つたある御人が翌日ホームにやつて来た。列車も気をきかせて五分停車のところを二十分も止まつていてくれました。

に交通の便が悪いためおとずれる人が少いという事は我々に充分の満足を与えた。

その先はしばらく行くとたちまちダムの為の工事現場となり大きなブルトーザーが谷間を埋めて直登してくるのが見えた（これはブルトーザーのみの道で、雨期でない間に谷を登つて上の方まで機械を上げておき、上と下から資材を運ぶトラック道を作りその上でダムの建設にかゝるのだそうである）工事場の人の話では来年には道も出来、多くの人が白山や温泉、滝を見にやつて来るだろうと話してくれた。

そこで我々はこの登山道を通るのは我ワンゲルでは我々が初めてであり最後になるだろうと、やゝ得意な気持でそのくせボンコツの足を引きずつて、途中まで出来ているトラック道も通つて平瀬へ下り学校に一泊。そして翌日は御母衣の合掌造の家を見て予定より一日早く帰つたのである。

こゝまでなら別に事実は小説程奇ではなかつたのであるが、八月十九日三時頃、自分は穂高の岳沢を性懲りもなく下つている一瞬に貴重な経験となつたのである。別に穂高の方が貴重になつたのではなく、白山の方である。

まさに他力本願ではあるが前にも記した地震がそれである。

あの地震で白山一帯はめちゃめちゃとなり、もちろんトラック道も全滅してしまつたようである。

かくして来年からのバス乗入はもちろんの事、全ての登山道が廃道同然となつた現在では二度と我々が通つたコースを踏む事は出来なくなつたわけである。

この気持は実際にこういう立場になつて見ないとわからないかもしれないが、自分にとつてはこの白山登山が貴重な体験となつたわけである。

―隠　岐―
――隠岐の印象――

工三　永田克己

立山での合宿の後、渡辺一良さんと二人で、北陸、山陰を伝つて、隠岐国ワンダリングを試みる事にした。二人旅もテントが少しばかり重くなるが、実にのんびりとして、まさしく風流弥次喜多道中であつた。もつとも風流と言つても、睡眠と入浴が大好きで、身を浄する事固い御同人の事、「風流話」が出なかつたのは、御推察の通りである。

ところで、隠岐島と名前は知つていても、どのへんにあるのか、何を産しているのか、すぐに思い浮ぶ人は余り多くはないようである。「隠岐島へ行つてきた」と言つても、「隠岐島とはどこだつたつけ」と言わんばかりの、すつきりしない顔をしてくれるのは、残念であり情ない事でもある。

高校生だつたら、佐渡島などといつしよに思い浮べ、後鳥羽、後醍醐の二上皇をはじめ、文覚上人が流された遠流の地であり、昔は隠岐一国をなしていた事ぐらいは知つているだろう。しかし隠岐諸島が島根半島の沖にある一群の島で、島は島前、島後に分かれ、群島の東部にある大島を島後、南西にある知夫里島、西島、中島を島前と呼んでいる事を知る人は、ほとんどいない事だろう。

まして、この島々に四万五千もの人々が住んでいる事はちょつと想像もつくまい。

島根半島と中海を作つて米子から北の方へ弓が浜が伸びているが、その先端の境港から船で、途中で道前に寄りながら、隠岐一番の町西郷へ約八時間かかる。我々はまず道後を訪れた。西郷から隠岐最高峰の大満寺山（六〇八）を越えて布施村に下り、最北端の白島を訪れ、五箇村をまわつた。島後から西島の別府へ渡り、そこから西島西岸の東洋第二の断層を見物し、再び別府にもどつて隠岐を去つたのである。

道中記を全部語りたいけれど、ここでは隠岐で特に印象に残ている事をつゞつて行きたいと思う。

船が西郷湾に近ずくと、はるかに大満寺山が隠岐の最高峰らしく西郷の町の後方にそびえ、緑のゆるやかな丘が湾をとりまき、すがすがしく晴れ渡つた朝の中に、いかにも平和な島を感じる。船から降りて、静かな朝の町の通りに立つた二人は、大きなザックも気になり、なんとなく他所者という気がする。商店街はみんなそろつているが、なんとなくこじんまりとしている。そして後から気がついたのだが、自動車の音のない事が、我々をばかに静かな雰囲気に置いたのであつた。

しかし、我々が朝食をとろうと学校への道を聞くと、わざわざそこまで案内してくれた島の人の親切にふれると、もはや先程の異和感は消えていた。そして旅の先々で出合う人々に、もはやなんのへだたりをも感じなかつたのである。島の人々の親切や素朴さは、いつも心の中に響いてきた。一方我々と同じように、隠岐を観光にきている人々と接つするとき、なんとなく同じ仲間という

久しさを感じるのに、何か遠慮めいた越える事の出来ない壁を感じるのは、都会の中の疎外された世界に生きている自分の不幸を感じさせるものであつた。

西郷に着いた日は、国分寺や玉若酢命神社や神社の宮司で、もと隠岐の国造家であつた億伎家を訪ねるなど、西郷近辺の史蹟を訪れ、大清寺山のふもとの有木小学校に泊めてもらう事になつた。有木部落総出で海水浴に行つたとかで、夜には小学校で、校長や部落の長等の部落の有力者が四人ばかり、酒を飲んで疲れを安めながら、我々に島を語つてくれた。

それは日本の発展の中に、とり残されていく島のみすぼらしい姿であり、日本の矛盾であつた。

この人達が炎々と語る話の中は、どのようにして現状を打開し、将来の発展を実現しようかという事でいつぱいであり、しかもその道がどの方向にも見あたりそうもない半ばあきらめが底を流れていた。山ばかりのこの島は鉱物資源が全く発見されていない。我々が鉱物についての話をもち出すと、鉱物調査に島へやつてきたのかとすぐさま問い単なる遊びと聞くと少しばかり期待はずれの顔をした。そういえば島の各地で、鉱物調査に来たのかと、何度も問われたのは、この島でめずらしいアルカリ岩石が出るそうだが、その他に島の人達が鉱物資源に注目しているのかもしれない。明治になつてから、佐渡島のように金が出るとだまされて掘つた大きな竪坑が残つているから、山に登つても落ち込まないようにと言つてくれた。金鉱ばかりでなく、この島には温泉を夢みて掘つたボーリング穴が五つもあり、今も全財産をなげて見込のないボーリングをやつている人がいるそうである。気の毒だが、止める事も出来ないと、表情は暗かつた。

漁業にしても、近所の良い漁場は、シーズンにやつてくる九州等の大型船に、ごつそり取られて、島の小船ではかなわないという。しかし松江から試験飛行を最近やり空路が出来ればめぐまれた史蹟と風光で観光が期待できるとその成功を待つていた。

島は実にのんびりと平和である。田の老婆は風水害も全然ない大変住み良い所だ、もう一度来る時には家に泊まつてくれと言つてくれた。住みなれた人々には、この平和な島は住み良い所に違いない。しかし、若い人達がこの狭い世界に、このままで満足しておれるとは思われない。

隠岐島は、我々の心を安めてくれるような、のんびりした地であつた。しかしその生活は予想以上にきびしいかもしれない。

みちのくの詩郷 "しぶたみ"を訪れて

学三　平野　ミドリ

盛岡駅を出て北に約三十分乗ると、汽車は、小さな駅「しぶたみ」に着く。降る旅人も少ない。

どちらの方向に行くべきかと迷つていると、駅員さんがパンフレットをくれ、行くべきところへの道を親切に教えてくれる。行く先は、きかなくてもわかつているのだ。みちのくの詩郷しぶたみの快い第一歩である。

静かな田園風景の中を、陸羽街道のほこりと共に歩き出す。車窓よりながめた岩手山は、大きい、美しい姿で私の左側で同行してくれるかのようである。人家もまばらな道が、今度は、家並の続く街道にかわる。啄木の故郷、渋民の部落である。啄木のころと変らぬ古いかやぶきの家々、そしてモダンな家もある渋民。しつとりと落着いているこの街道筋。愛宕神社、下宿していた斉藤家小学校、宝徳寺と、啄木の思い出の数々の中を進む。

家並の終つた所を左に折れて、田んぼ道となる。さつきまで、横を歩いていた岩手山が、今度は、目の前に、雄々しい姿を見せる。あたかも人を抱き入れてくれるかの如くに。美しい、ふるさとの山。

駅より、三キロの道を、四五分かかつてようやく木の歌碑に着く。

やわらかに柳あをめる北上の
岸辺目に見ゆ泣けと如くに　　啄木

緑濃い、稲田の中に、デンと立つている。岩手山を右に左に姫神山、真下には北上川の流れ、そして鵜飼橋、思い出のすべてにかこまれて。静かである。

すばらしい勿論気の中にひたつていると、いつしか知らず、自分も啄木になつてしまつたようないい気になつてしまう。

今は、岸辺には柳もない渋民だが、訪れる人も少ないこの地が、東北の旅のよき思い出となつている。

穂高回想

学三　鋤柄　栄子

南に北に西に、どれ位のびているのだろう、きれる事なく青い山脈が白い夏雲の中に連んでだんだんとこちらへ重なり合つている北アの尾根が鮮かに迫つていた。きのう越えて来た西遠尾根を千丈沢乗越あたりに懸つている雲が緑の尾根と黒い岩尾根とに分け、突出た槍の穂先は青い空に吸い込まれていくような錯覚をおこした。

休憩　渾身の力とありつたけの神経を使つた直后一緊張からの解放感と同時に東の間の白昼夢に落ちてしまつた。確かに裏銀嶺走から遮蔽の為、私には精一杯で、ブロムナード・グライミング等ではなかつた。深い飛弾の谷間から吹き上げてガスが湧沢沿、ジャンダルムを覆い時折表わす岩峰は一層峻しく荘然とし我々の存在などは無視していた。登山はひとりよがりなところがあると言われる。本当にそうであろう。チームワークによつて結ばれているが、苦しさの中に、小休憩の中に、楽しい　ロマンチックな、或は感傷的な心の世界がある。人はそんな時感傷を感ずるのかも知れないし、この様なかけがえのない感動をこのままにしておく事は出来ないだろう。ガスがかかつて来て次第に青い空を狭めて来た。午后から又一降り来そうだ。私は振り返つて手前の湧沢から穂高連峰のひとつひとつのピークを確認してザックを背負つた。風にも雪にもさらされて尚厳然とその存在を主張している岩峰に威圧され一編の酷酔と感じた。再び黙々と歩き出した。大半の行程を終えて安堵の為か、背の二尺ザックが急に重くなつた。前穂に行くかどうか迷つたが、結局雨が降り出した為ガスで視界ゼロになつた尾根筋を岳沢へと下つた。

Coffee　野毛柳通り

名曲　リス

Tel. (3) 0073

牧　×××
養　×
講　×
座
×××

ワンゲル用語考

我々ワンゲル部員の語学コースは英語、独仏語、ワンゲル語ということになつている。ワンゲル語にはめつぽう強いが、英語だの、独仏語だの、といわれると、その場にいるのがしのびなく、逃げだす者が多いのが現実じゃなかろうか。まあこういう連者も、あてにはならない。そのワンゲル語。他人の前では、はばからなくちゃならないのはつらい。教養とはじゃまくさいものよ。この筋のエキスパートは不幸にも豊富だ。創造的言語感覚過多症とでもいおうか、次々に新作発表をおこたらない。我々はいつとはたしに、何げなく学びとるのである。うつかりしていると、どんどん身についてしまう。この創造者が、なみなみならぬセンスの持ち主ならば、我々はけなげな心の持ち主じゃなかろうか。ワンゲル用語と一口に言つても、各Ⅳ、Ⅴ共通の公用語と思われる萬人向きのものから、とく少数の無效獲者のみに許された残別語もある。特許の札でもさがつているのか、本人以外に余りはやらないのもある。ある大学Ⅳ・Ⅴ発行のワンゲル用語事典からいくつか御紹介してみよう。

○うすい（形）頭の弱いこと。用例、「うすいなあ」
○爆謀（名）山などで、おかしを三三人で食べてしまうと離れて来た者、「あつ、インボウ」もあとの祭り。
○滅（接尾）何事にもあれ、その道のエキスパートを指す。山の頂上へ行くと後輩に周りの山々を教えたがる「解説滅」○古狸（接尾）付属語であつてそれ自身何の意味も持たない語。否定の助動詞「ず」「ない」の代りに「じ山の古狸」を使う。用例、「あの山はなんですか」「わからじ山の古狸」○武器（名）。ワンゲルにおける食事は軍隊に於ける戦いに等しい。ことから広義で食器を指し、狭義にはナイフ、フォーク、ハシを指す。
○勝因、敗因（名）（形動1だ）因の字はほとんど意味を有しない。一般向きには「巻き道したのが勝因となつた。」熟練向きには「あつ、武器を忘れた。敗因だなあ」と使用。○ヒーヒー（感動）バテてきた時の疑声語。但し、これが言える間はバテていない証拠。○じみる（動）「地見る」から出たことば。テントサイト、山路で何かを拾う事をいう。○岳人線（名）狭義では夏山でヤッケを着こんだり、山の道徳をわきまえないのを指し、広義では仲間以外のものみんな。　（無名氏）

お国自慢（静岡の巻）

工三　金田精彦

「駿州一の大都会……」とここ静岡に汽車（当時はまだあの力強い機関車でした）から降りたとたんに呟いだしたのは、眞のおじさんでした。まだ私の生まれないまえの話。

そうです、大都会、生まれる前からの故郷、神代の時代、ヤマトタケルノミコトが、草原で火をつけられ、草を刀でなぎたおして焼け死ぬのを防いだ時から、オトタチバナノサクヤヒメという美しいおヒメさまが海に飛びこんで以来、府中の街の始まりです。

お話はともかく、萬葉の時代よりも前から人間が住みついた所を見ると、よほど暮しよいところだつたに違いありません。まだ東京が海の底だつたヤヨイ時代、登呂の村は栄えたのでした。それから土佐日記の宇津谷峠、東関紀行のこと、水鳥のはばたきに平家が逃げたり、今川焼の殿様が住んだり、家康のじい様が余生をおくつたりしてもつぱら歴史の裏を、世の中のことも知らずにのんびりと平和に過ごしてきました。こんなところに、静岡の町がのどかで、年の若い者まで、すぐにジジくさくなつてしまうわけが分ります。

それでは現代の話。くはしく紹介したいとか。自分で確かめたいと思う人は、駅の側からピンク色の観光バスが出ていますから、それに乗つていれば次郎長の墓まで見ることができます。

静岡の真中にある消防署の高い塔からながめると、おそらく静岡の街は全部みることができるでしょう。

その名の通りの静かな街並みが、平におだやかに、近くにある山すそまで拡つています。そして山に行き当たらない南側と東側は、街の先は、秋には実つた稲の穂波が遠く大きく取りかこみ、街なみは次第にまばらになつて、最後にはポツンポツンと稲にのまれるように、あとはずつと田んぼが続きます。でも近頃の様子はよく分りません。きつと住宅が増えていることを考えると今頃は稲をおし分けて、せいいつぱい拡がり遠くの山々や隣の清水や草なぎの町とくつついてしまつていると思います。でもそんなに大きくなつたとしても、工場のニオトツなどほとんどない、きれいな静かな、どちらかといえばのんびりした街が拡がつていつたと思います。

静岡の自然は豊富です。周囲が人間の営みをはなれた自然の輪郭につつまれています。

静岡の春は、どこでも同じ様に、新入生のピカピカと桜の花で始まつて行きます。しかしやつぱり冬の雪がまだたくさん残つていられけれども、何とも云えない温たかそうな優雅なもやの上に、冬に比べるとずいぶんやはらいだ風をしている富士山に春を見つけることができます。冬のコチンコチンの風にとぎすまされていた鋭い輪郭もぼやけ、日本画をそのままそこに開いた様な姿は、どこかから雅楽の間のびした音とたいこが聞こえそうです、

三月に入るといつになつたら富士山がそんなふうに見えるかと、毎日ながめて春を待つている人もたくさんいることと思います。春には、静岡のお祭りです。四月の一日から浅間山の桜は満開で山が桃色につつまれ、山車におみこし、神社の広い境内ではサーカスや、子供達のよろとびそうなオモチヤやお菓子を、うんととさと持つた屋台がずらつと並びます。男の子は、ピストル、パチンコ、女の子は海ほうずきや、きれいな飾り物、そして何万そろつて綿菓子やのしいかを買つてもらつて、たいそうにぎやかな事。このお祭りのために、市内の学校は始業式が6日になつている位、お正月に次ぐ子供の天国です。

夏になると、この街はギラギラしてくる様な感じです。空気がそれ程汚れてないためか、空は意外に青く澄んで、真夏へ太陽は、直かに照りつけてきます。海が近いので、気持のいい潮風が街中をかけめぐつていきますが、やはり暑いことには変りありません。海は街の南の方へ3Kばかり行つたところにあり、浅間山や、街の西にすぐ盛り上つている徳願寺の山からみると、真青な海が白波をたてて海岸に打ちつけているのがみえます。また、小さい漁船が近海漁をとつているのが夜間で見えかくれしているのを、よく見かけます。この海は駿河湾ですこの海を最も美しく見ようと思うならば、静岡から東へ三つ目の由比という駅でおりて、浜石岳にのぼれば、沼津の千本松の美事な海岸線が、また、ずつと南に下つて太平洋と連なつている出口の御前崎まで行けば、豪快な波の打ちつける、実に大きな海を見ることができます。駿河湾は他の海に比べて何か野性的な感じがします。

海岸線をたどつていつても、遠浅のところは、入江になつている所を除いて、ほとんどなく、いきなり深い海となつています。何でも、湾の中央部は二〇〇〇米以上の深さで、漁船がさよつた深海魚を時々捕えるということです。もうひとつ、この海の海岸線には、いきなり山から海になつている所を除いて、ほとんどすきまのない樣松林が続いていて、潮風が農作物をいためるのを防いでいます。

さて、あれ程真緑で活発だつた山々も、色があせだすと、そして山肌にミカンの山吹色の実がなりだすと、秋がおとずれてまいります。稲の刈りとられた後の田んぼや、あぜに干してある稲の束が見られる樣になり、空は青というよりも紫がかつて、きめの細い白い雲が流れだします。夏の間は目立たなかつた富士山も、次第にくつきりとして、夕焼に映える樣になります。もう春の日本画の樣な姿ではありません、初雪を待ち受けてキリッとしています。そして私の目の底に焼き付けられているのは夕焼の美しさです。安倍川の西岸にたつ徳願寺の山に日が落ちると、街は西の方から順々に影つていき、市の中央部のビルが、谷津山の放送局の鉄塔が、そして日本平が影に入ると、空も赤くなりだします。徳願寺の山もその頃になると、すつかり暗緑色の黒い山となります。そして日が沈んだあたりはまだ白い雲が、真上の空を一面におほつた鯖雲がだいだい色に映えそれが時と共に山に近づいて行きます。実にゆつくりと、この大地の回転と共に、そんなのをよく安倍川の土手に行つてながめました。山の影がすつかり夜のとばりの中に入つても空はいつまでも赤く、黒い山と赤い空の境い目ほどこでもきれいでした。物心のついた頃の自分が土手の上で転がした目転車のそばに仰向けになつてながめていたことは、今もなつかしく思い出されます。

西を北から南に流れる安倍川、その河口まで、一瀉千里流れの早さをゆるめずに駿河湾に流れこみ、山から押しだされた石や砂は河原をうめつくしています。昔は大井川とならんで難台渡しの行なはれたところですが、今は立派な橋がかゝつています。遠い登呂の昔までさかのぼれば今の市中を流れ、安西、安東の地名をつけ、また徳願寺のある山すそに沿つて、田原の海に泳いだこともありました。市の到る所で井戸をほれば、かならず清らかな水が豊富に流れだしてきます。この川の源は、白峰の山波がずつと南下して、笊ケ岳から山伏まで達したところ、大谷崩れにあります。山伏、八紘嶺の峻嶮な山容を持つ美しい山々にかこまれた谷から、何本もの沢を集め、沢は全て急峻な滝によつて次第に合はさつて、梅ケ島の温泉に致る頃は、冬ならば身を切る程の冷たい水がせまい谷底をおしめき、ひしめき流れます。両岸は峻くきりたち、見上げる空は眉をすぼめたように、天頂のあたりだけが見られます。渓がここえ来たのはおととしの冬きれいに晴れたお正月の時、ここの温泉へ泊りました。七面山から尾根伝いに八紘嶺までやつてきて、安倍峠の静かな道を、夕暮近く、深い谷底にぽつんと立つている小屋がなかなか近くにならないのに痩を立てながら、それでも暗くなつた山道を転ぶようにしてかけおりました。温泉の温度は四十度位で冬だつたので中に入つていても寒い位でした。広い浴場の池に、谷の左側の洞穴の中に湧きだしたお湯をそのままためた岩ブロがありましたがそこに仲間四人と入りこんで大声で歌を唄つたのはいい気持でした。

川の流れに沿つて両側には十枚山の最高峰を持ち上げた山脈がほんとに真直ぐに続き、それは静岡の街のはずれまで続きます。

街の周りをぐるりとかこんで一見どこかの盆地の樣に山は近くそして高くそびえ、わずかに南の方の海のところだけ何もないために海の近くだということが分ります。安倍の山は実に感情細やかです。そしてその山波は全て南アルプスの原始の巨大な山に連なつています。家の窓から龍爪山、真富士山、見月山とたどつていくと、それらよりはるかに高く白い雪につつまれた聖岳を見ることができます。大井川をはさんで、そのまた向うにある山が安倍の山を大きく抱いている樣にあるきびしさを持つて立つている樣子でした。

こんな良い街に産ぶ声をあげたのがこの私、一九三九年の秋の出来事。以来一九五七年まで、誰れの仕業かも考えずにじつとここで大きく育つたのです。

ここをはなれて四年目の今、自分の心の中には、おぼろげな淡い感傷しか残れていません。一八年間も暮した故郷としての極めて観念的な感情だけです

とにかく家庭のおやじ以来の隠居の地、緒君、諸嫌、おじいさま、おばあさまになつた時は、そろつてこの静岡に隠居しようではありませんか。

北川－氷川－丹波－氷川－立川

○八ツ岳（七月九・十日）
斎藤(卿)、井口、中村
坂場－中山峠－硫黄岳－横岳－赤岳小屋－[illegible]

○尾瀬－一年－（六月二十四～二十六日）
野尻(卿)、深尾、亀井、三宅、三浦、吉川
沼田－山の鼻小屋－三条滝－長蔵小屋－沼田

○立山－夏期合宿－（七月十七日～三十日）
前宿隊（十九日～）
西野、高橋、渡辺(卿)、飯塚、斎藤(卿)、江崎、白井、井田
後発隊（二十一日～）
横林、斎藤(卿)、斎藤(卿)、永田、跡部、谷、谷上、[illegible]、吉田(卿)
郡司、田中。
本隊（二十三日～）　コース、人員本文参照

○仙人池－分散－（七月三十一～八月一日）
(L) 米屋、倉田、竹内、斎藤(卿)、谷、谷上、増田
雷鳥沢－剣沢－仙人池－ケヤキ平

○針ノ木越え－分散－（七月三十一～八月二日）
(L) 吉野、高橋、渡辺(卿)、金田、江崎、永田、跡部、矢島
双六池－鏡平－笠ヶ岳－槍見温泉－[illegible]

○槍穂縦走　八月十八日－二十一日
(L) 江崎、白井、鋤柄、宮崎
双六池－樅沢岳－槍ヶ岳－北穂－涸沢岳－穂高小屋
奥穂－岳沢－上高地

○[illegible]－二年－（八月二十七～二十九日）
二年十七名

◎海谷－四年－（九月一日～三日）
吉野、米澤、塚原、横林、渡辺(竹)、倉田、岩村

○北岳（九月一日～六日）
(L) 永田、郡司、安部
芦安－北岳－間ノ岳－農鳥－奈良田

○北海道（八月五日～二十五日）
[illegible]、吉柏

○上高地（九月二十三～二十四日）
[illegible]、部外者
上高地－焼岳往復

雷鳥沢－一ノ越－ザラ峠－五色原－平－針ノ木－大町

○白山－分散－（七月三十日～八月五日）
(L) 宮崎(卿)、白井、宮崎(卿)、田中、平野、郡司、井口、宮崎(卿)、栗
金沢－市ノ瀬－白山－大白川－平瀬－御母衣－

○能登半島－分散－（七月三十日～八月五日）
(L) 横林、井田、平林、石田、井上、三神、勝俣、塚原、寺沢、広瀬、斎藤(卿)、亀井、岡本、三宅、深尾、[illegible]
高橋(卿)所、岩村、田阪
富山－能登島－小木－狼煙－曽々木－輪島－長浜

○隠岐－分散－（七月三十日～八月十二日）
渡辺(竹)、永田(悦)
出雲－松江－大山－隠岐

○裏銀座縦走（八月十三日～十八日）
(L) 宮崎(卿)、江崎、鋤柄、白井、渡辺(宗)、安部、原、倉田
大町－七倉－濁－烏帽子－三ツ岳－野口五郎－
三俣蓮華－雲の平－双六池

○笠ヶ岳（八月十八日～二十日）
(L) 渡辺、安部、原、倉田

◎秋期ワンダリング

○北八ツ岳（十月十二日～十五日）
(L) 斎藤(卿)、岩崎、三宅、金子、亀井
茅野－渋ノ湯－高見石－麦草峠－雨池－[illegible]
－双子池－大河原－蓼科山－小諸

○白峰三山（十月十二日～十六日）
(L) 金田、江崎、宮崎、原
甲府－芦安－夜叉神－北岳－間ノ岳－農鳥－富士

○上高地（十月十二日～十六日）
(L) 三神、跡部、寺沢、織田、深尾、中村、斎藤、[illegible]、矢島、
矢野
蝶、常念往復、槍、焼岳、西穂

○唐松岳・鹿島槍（十月七日～九日）
吉野、部外者
信濃四谷－細野－唐松－五竜－鹿島槍－冷池
－赤岩尾根－大谷原

○苗場山（十月十二日～十六日）
(L) 渡辺、塚原、宮崎(仁)
越後湯沢－八十沢－和田小屋－苗場山－赤湯

法師温泉―四万温泉―中三条

○魚沼三山（十月十二日～十六日）

(1) 鈴鹿、高隈、竹内、牧原

小出―茂倉岳―中岳―八海山―五日町

○月山（十月十三日～十五日）

(1) 岩村、福井、石田、部外者一名

山形―志津―姥沢―牛首―月山―湯殿口―鶴田

○会津駒・尾瀬（十月十三日～十六日）

所、池田、喜多村、佐々木

若松―田島―桧枝岐―駒ヶ岳―大形岳―

三条の滝―沼尻―大清水

○奥秩父（十月十二日～十七日）

(1) 那司、田中、市橋、片江、谷合、小玉

荻窪―塩山―金峰―甲武信―雁坂―天科―

塩山

○那須（十月十二日～十五日）

(1) 井上、谷上、諸節、橋本

黒磯―板室―三斗小屋―茶臼岳―朝日岳

―三本槍―甲子温泉―白河

※この記録は、記録係の方にはほとんどはかった為、編集部で集めたので間違いがあったり書き落しがあるかもしれませんが御了承下さい。

※今後ワンダリングを行なわれるあれば必ず報告書を記録係に提出するようにして下さい。

ヨコハマでしゃれたお買物

金曜定休

横浜 高島屋

電話 (44) 1251

明るい売場で楽しいお買物…

NOZAWAYA

金

野澤屋